

国立国語研究所学術情報リポジトリ

宮古語の動詞活用：

代表形、否定形、過去形、中止形

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-11-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00002463

宮古語の動詞活用

—代表形、否定形、過去形、中止形—

かりまた しげひさ

1 調査の概要

2011年9月4日から9日までの5日間、国立国語研究所の合同調査で宮古島の9地点の文法調査を実施した。調査地点は保良、砂川、宮国、与那覇、来間、久貝、狩俣、池間、国仲である。調査項目は、沖縄言語研究センターが1982年に作成した『琉球列島の言語の研究 全集落調査票』（以下、「全集落」）に収録された37の動詞語彙である。そこに収録された動詞語彙目は、琉球諸語の下位方言の動詞の活用のタイプのおおよそを知ることができるよう選定されたもので、強変化動詞（以下、強変化）と弱変化動詞（以下、弱変化）の語幹末子音に*b、*m、*k、*g、*s、*t、*n、*r、*w等をふくむ規則変化動詞と、「有る」「居る」「来る」「する」「ない」の不規則変化動詞がふくまれる。それぞれの動詞の活用のタイプを特定できるように代表形（スル）、否定形（シナイ）、過去形（シタ）、中止形（シテ）のよっつの文法的な形を下位項目としてあげている。

代表形は、当該方言の完成相の動詞を知るために設定された項目である。否定形は、基本語幹を確認するための項目である。基本語幹は、命令形や勧誘形からもえられるが、無意志動詞からは命令形をえられないので、否定形を選定している。過去形は、音便語幹を確認するためのものである。北琉球諸語のばあい、中止形でも過去形と同じく音便語幹を確認することができる。「全集落」に中止形が設定されたのは、南琉球諸語の音便現象の有無を確認するうえで、過去形のほかに音便語幹の有無を確認するための項目を追加したからである。

今回の宮古島合同調査では「全集落」を例文つきの調査票に改訂したものを使用した。改訂した調査票は、西岡敏（沖縄国際大学）を研究代表者とする「琉球宮古方言の言語地理学的研究」基盤研究（B）で「全集落」の動詞活用形の語形を得やすくするために、例文を付したものである。そこに示された例文を当該方言に翻訳してもらおうという調査方法をとった。

なお、調査項目の量がすくなくないことと調査日数を考慮して、調査項目を三分割し、3班で分担して調査する計画であった。話者の都合、調査員の人数の都合などで3班つくれず、全部の項目を調査できなかった地点がある。また、調査はできたが目的とする当該語形が得られていないばあいもあった。本報告では宮古島合同調査でえられた資料のほかに、かりまたが調査した島尻¹（2011年12月10日）、久貝²（2012年3月3日）、狩俣³（2011年8月15日、16日）の資料も使用する。島尻の文法調査はまったく新たに追加されたものである。

¹ 話者は島尻生抜きのI.S氏。男性。昭和12年5月6日生。

² 話者は久貝生抜きのY.K氏。男性。大正15年12月23日生。

³ 話者は狩俣生抜きのN.Y氏。女性。大正15年12月15日生。

本報告で検討する地点は 10 地点である。

日本語シテ中止形に対応する宮古語諸方言(以下宮古語)の中止形はふたつの形式がある。ひとつは、numi: (ノンデ)、kaki: (カITE) のように基本語幹に語尾 i、i を後接させたものである。もうひとつは、numitti (ノンデ)、kakitti (カITE) のように語尾に ti をふくむものである。改定調査票では前者を「アリ中止形」、後者を「シテ中止形」としているので、本報告ではアリ中止形、シテ中止形の名称を使用する。

アリ中止形は、ならべあわせ文やふたまた述語文の非終止の述語にあらわれ、つづいておこる二つの従属的な、あるいは、非従属的な動作をあらわす。シテ中止形は、並べあわせ文、ふたまた述語文の非終止の述語のあらわれ、非従属的な動作をあらわすことがおおい。アリ中止形は、あわせ述語の前要素にもなる。調査票作成にさいしては、ふたつの中止形が収集できるようにふたつずつ例文を作成している。

2 語幹と語尾

動詞の活用形は、その形つくりにおいて、語幹、語尾、助辞などの要素からなる^{注4)}。語尾と助辞は、文法的な意味に応じて変化する部分で、のこりの変化しない部分が語幹である。北琉球諸語の動詞は、語幹は、基本語幹、音便語幹、連用語幹のみ一つの語幹が存在する。基本語幹、音便語幹、連用語幹のみ一つの語幹のうち、基本語幹と音便語幹とよばれるものは、日本語にもあるのだが、連用語幹は、北琉球諸語に特徴的にみられるものであろう。語幹と語尾の境界には kak-e: のように「-」を、語幹と助辞の境界には nudi=kara のように「=」を挿入する。

基本語幹	音便語幹	連用語幹
kak-aN (書かない)	kate-aN (書いた)	kate-uN (書く)
tur-aN (取らない)	tut-aN (取った)	tu-iN (取る)
jum-aN (読まない)	jud-aN (読んだ)	jun-uN (読む)

表 1 沖縄島那覇市首里方言

基本語幹	音便語幹	連用語幹
hak'-aN (書かない)	hatt ₅ -aN (書いた)	hat ₅ -uN (書く)
tur-aN (取らない)	tutt-aN (取った)	tu-N (取る)
jum-aN (読まない)	jud-aN (読んだ)	jum-iN (読む)

表 2 今帰仁村謝名方言

表 3 にみるように、あるいは本永守靖 1977 などがのべるように、宮古語の動詞の語幹には現代日本語(以下、日本語)の音便語幹、北琉球諸語の連用語幹などを設定する必要はなく、

4 語幹、語尾の定義は、鈴木重幸(1972)にしたがう。

基本語幹だけをみとめればよい⁵⁾。音便語幹を設定しなくてもいいことは宮古語の動詞活用のおおきな特徴である。宮古語の動詞には基本語幹の語幹末子音をかさねる変種をもつものがある。今回の調査項目の kav (被る)、niv (眠る)、az (言う) が変種をもつ。代表形は kav、niv、az のように子音語幹でおわり、語尾をもたないが、命令形、勧誘形、否定形は kavv-i (被れ)、kavv-a (被ろう)、kavv-an (被らない)、nivv-i (眠れ)、nivv-a (眠ろう)、nivv-an (眠らない)、azz-i (言え)、azz-a (言おう)、azz-an (言わない) のように語幹末子音がかさなってあらわれる。v: (売る) も代表形は長子音単独で語尾をもたないが、命令形、勧誘形、否定形は vv-i (売れ)、vv-a (売ろう)、vv-an (売らない) のように短い子音をかさねた子音だけの語幹をもつ。これらとはことなる語幹の変種をもつタイプもあるが、それらにふくめ宮古諸語の活用形と活用のタイプの全体については稿をあらためて述べたい。

基本語幹		
kak-an (書かない)	kak-ŋtaŋ (書いた)	kak-ŋ (書く)
jum-an (読まない)	jum-taŋ (読んだ)	jum (読む)
tur-an (取らない)	tu-ŋtaŋ (取った)	tu-ŋ (取る)
kavv-an (被らない)	kav-taz (被った)	kav (被る)

表3 平良下里方言

強変化としては「飛ぶ、遊ぶ、漕ぐ、行く、落とす、出す、持つ、切る、縛る、掘る、降る、被る、閉じる、寝る、買う、売る、飲む、食べる、酔う、洗う、言う」があがっている。弱変化としては「捨てる、降りる、落ちる、呉れる、貰う、起きる、着る、坐る、見る、蹴る」があがっている。不規則変化としては「来る、する、有る、居る、死ぬ、無い」があがっている。

「ない」は日本語では形容詞に分類されるが、琉球諸語では不規則変化として分類される。宮古語の形容詞が ku 連用形にももの存在をあらわす動詞 az がくみあわさって文法化した活用形をもったり、語幹をかさねる重複型の語形をもったりするのに対して、宮古語の「ない」はそのような活用形をもたないことから動詞に分類される。もちろん、動詞に分類されるとはいつでも、アスペクト、ヴォイスなどの形態論的なカテゴリーをもたず、命令形、勧誘形などのムード形式をもたないなど、形容詞とおなじ文法的な特徴をもっている。

「縛る」に対応して「^く括る」のあらわれるのが期待され、「寝る」には「眠る」、「食べる」には「食らう」、「閉じる」には「くる」、「貰う」には「得る」、「坐る」には「^お坐る」、「居る」には「^お居る」のあらわれることが期待されている。

日本語の弱変化のうち、語幹が1音節で語幹末が母音 i になる mi-ru (見る)、ki-ru (着る)、ni-ru (煮る) などの動詞は、古代中央日本語 (以下、古代語) でも弱変化だが、語幹

⁵⁾ 基本語幹、音便語幹、連用語幹のみつつの語幹の変種の名称は、上村幸雄 (1963) 「首里方言の文法」 (『沖縄語辞典』) による。なお、上村 (1963) は上記みつつの語幹のほか「融合語幹」「短縮形語幹」も設定している。

が2音節で語幹末が母音 i、あるいは e になるタイプの動詞（“上二段”“下二段”とよばれる）は、否定形 *oki-zu*（起きない）や命令形 *oki-jo*（起きろ）などの弱変化型の活用形と、代表形 *ok-u*（起きる）、連体形非過去形 *ok-uru*（起きる）などの強変化型の活用形とが並存している。このタイプの動詞は、強変化と弱変化の混合変化活用動詞（以下、混合変化）とよぶことができる。日本語強変化の「死ぬ」は、古代語では *sin-azu*（死なず）、*sin-itari*（死にたり）のような強変化型の語幹と語尾をもつ活用形と *sin-uru*（死ぬ・第二終止形）と *sin-ure*（死ぬ・第三終止形）のような混合変化と同じ語幹と語尾をもつ活用形⁶⁾とが混在した混合変化の変種とみることができる。

		否定形	命令形	過去形	非過去	連体	
現代 日本語	強変化	行く	<i>ik-anai</i>	<i>ik-e</i>	<i>iQ-ta</i>	<i>ik-u</i>	<i>ik-u</i>
		死ぬ	<i>cin-anai</i>	<i>cin-e</i>	<i>ciN-da</i>	<i>cin-u</i>	<i>cin-u</i>
	弱変化	起きる	<i>oki-nai</i>	<i>oki-ro</i>	<i>oki-ta</i>	<i>ok-iru</i>	<i>ok-iru</i>
		見る	<i>mi-nai</i>	<i>mi-ro</i>	<i>mi-ta</i>	<i>mi-ru</i>	<i>mi-ru</i>
古代 日本語	強変化	書く	<i>ik-adzu</i>	<i>ik-e</i>	<i>ik-itari</i>	<i>ik-u</i>	<i>ik-u</i>
	混合 a	死ぬ	<i>cin-adzu</i>	<i>cin-e</i>	<i>cini-tari</i>	<i>cin-u</i>	<i>cin-uru</i>
	混合 b	起きる	<i>oki-dzu</i>	<i>oki-jo</i>	<i>oki-tari</i>	<i>ok-u</i>	<i>ok-uru</i>
	弱変化	見る	<i>mi-dzu</i>	<i>mi-jo</i>	<i>mi-tari</i>	<i>mi-ru</i>	<i>mi-ru</i>

表4 日本語の動詞活用タイプ

島尻方言、狩俣方言、久貝方言では古代語の弱変化の否定形だけでなく、古代語の混合変化の否定形も、語幹末が母音 i になる基本語幹に否定語尾 *-n* を後接させる。すなわち、古代語混合変化が弱変化化している。島尻方言、狩俣方言は「死ぬ」も弱変化化しているが、久貝方言では強変化化している。

- 1) *kirju jurugacca:mai n:ta: utin.* (木を揺らしても実は落ちない。) 狩俣
- 2) *baja: umanna urin.* (私はここでは降りない。) 久貝

いっぽう、保良方言、宮国方言、来間方言などでは、古代語の弱変化、混合変化に対応する動詞の代表形や命令形は、語幹末が母音 i、あるいは i: でおわる基本語幹に語尾 *ru* を後接させる弱変化型の活用形だが、否定形は、語幹末が子音で語尾が母音 *-u*、*-u:* ではじまる強変化型の活用形である。これらの方言では、弱変化が混合変化化している。

⁶⁾ 第二終止形は、強調文の述語になる活用形で焦点化助詞「ぞ」「なん」「や」「か」と呼応し、連体形とホモニムである。第三終止形も強調文の述語になる活用形で「こそ」と呼応し、条件形とホモニムである。

- 3) vvaga tuzzuba smari fi:ru. (おまえが鶏を縛ってくれ。) 保良
 4) utuṭ^ha sudan̄kaija ka:ssuba fu:ŋ. (弟は兄には菓子はくれない。) 保良
 5) kunu fsuzza azumakaṛ^ɟa numi mi:ru. (この菓は甘いから飲んでみろ。) 保良
 6) uja: ja:kju:juba: mju:ŋ. (いつも私は弟に菓子をくれる。) 保良
- 7) gumiu umaŋkai sitiru. (ゴミをそこに捨てろ。) 宮国
 8) mma: fz:fznu kinnumai situn̄. (祖母は古い着物も捨てない。) 宮国
 9) unu ma:zzu kumaŋkai kiri fi:ru. (その毬をここに蹴ってくれ。) 宮国
 10) oṭ^huṭoo aṭaŋ koosuba əu:ŋ. (弟は兄に菓子をくれない。) 宮国
- 11) vvaŋa tuzzuba: smari/sɪmari fi:ro. (おまえが鶏を縛ってくれ。) 来間
 12) utuṭoa azanna/suzanna ko:suba: fu:ŋ. (弟は兄には菓子を呉れない。) 来間

古代語の混合変化に対応する動詞が混合変化であられる宮古語下位方言がある。なお、同じ混合変化とはいっても、後述するように古代語混合変化は、終止形非過去と連体形非過去に強変化型の活用形があらわれるが、宮古語混合変化は、否定形と勧誘形に強変化型の活用形があらわれる。否定形の語尾に uŋ、u:ŋ を有する動詞は混合変化で、iŋ、i:ŋ を有する動詞が弱変化で、aŋ、a:ŋ を有する動詞は強変化である。

		否定形	命令形	過去形	非過去	連体形	
保良方言	強変化	書く	ik-aŋ	ik-i	ik-sta:	ik-s	ik-s
		死ぬ	sn-aŋ	sn-i	sn-ta	sn	sn
	混合	起きる	uk-uŋ	uki-ru	uki-ta:	uki	uki-z
		見る	mj-u:ŋ	mi:-ru	mi:-ta:	mi:	mi:-z
島尻方言	強変化	書く	ik-aŋ	ik-i	ik-staz	ik-s	ik-s
	弱変化	死ぬ	sni-ŋ	sni-ru	sn-ta	sni-z	sni-z
		起きる	uki-ŋ	uki-ru	uki-taz	uki-z	uki-z
		見る	mi:-ŋ	mi:-ru	mi:-taz	mi:-z	mi:-z

表5 保良方言、島尻方言の動詞活用タイプ

本報告では、古代語、ときには現代日本語と対比させながら宮古語の活用形、および活用のタイプをみる。

3 否定形

宮古語の動詞は、否定形をみることで当該の動詞が強変化であるか弱変化であるか混合変化であるかをみわけることができる。

否定形の語末には、**an**、**in**、**un** があらわれる。否定形の語末の **n** を **dza:n**、**dja:n** にとりかえた形式もあらわれる。語末に **an**、**in**、**un** をもつ形式は、さまざまなあらわれ方をし、多義的であるのに。-**adza:n**、**i-dza:n**、-**udza:n** をもつ形式は、話し手の意志や判断をあらわす。-**adza:n**、**i-dza:n**、-**udza:n** も基本語幹からつくられる形式なので、本報告では**-an** とともに提示する。

13) **uja: tɛŋkzga bazkaiba imkaija ikazan.**

(父は**天気が悪いから**、海へは**行かない**。) 宮国

14) **ameno thokja:nna pukankai nimottsw idasaɕa:n.**

(雨のときには外には荷物を**出さない**。) 宮国

15) **karja: unaga du:nu wa:juba: vvaN/vvadja:N.** (彼は自分の豚は**売らない**。) 与那覇

an は、古代語の強変化に対応する動詞にあらわれる。語幹末が子音の基本語幹に後接する。**in** は、古代語の弱変化に対応する動詞にあらわれる。他の活用形とならべると、否定形は、**uki-n** のように分析され、弱変化の母音語幹に語尾 **n** が後接しているとみることのできる。**un** は、混合変化に対応する動詞にあらわれる。命令形が母音語幹に語尾 **ru** を後接させる形式であり、否定形は、強変化型の子音語幹に語尾 **-un** の後接した **uk-un** と分析できる。活用形全体をみると、否定形の語尾に **-un** のあらわれる動詞は混合変化である。

参考として調査でえられた命令形もあげる。強変化型の命令形は、子音でおわる基本語幹に語尾 **i** を後接させ、弱変化型の命令形は、母音 **i**、あるいは **i:** でおわる基本語幹に語尾 **ru** を後接させている。

保良方言

古代語混合変化の否定形は、保良方言では語尾に **-uŋ**、**-u:ŋ** をもつ混合変化型であられる。いっぽう、古代語弱変化の「蹴らない」「着ない」「坐ない」、混合変化「死なない」は強変化型であられ、古代語弱変化の「見ない」は混合変化型であられる。不規則変化の「する」は混合変化型の活用形で、「居ない」は強変化型の活用形であられる。

強変化／**tuban** (飛ばない)、**asɿpan** (遊ばない)、**numan** (飲まない)、**kugan** (漕がない)、**ikan** (行かない)、**utusan** (落とさない)、**idasan** (出さない)、**mutan** (持たない)、**puran** (掘らない)、**ffan** (降らない)、**kssan** (切らない)、**uran** (いない)、**vvan** (売らない)、**kavvan** (被らない)、**nivvan** (眠らない)、**azzan** (言わない)、**ka:n** (買わない)、**fa:n** (食わない)、**ara:n** (洗わない)、**mura:n** (貰わない)、**bja:n** (酔わない)、／**kiran** (蹴らない)、**kssan** (着ない)、**bzzan** (坐ない)、**snaŋ** (死なない)、
混合変化／**urun** (降りない)、**utuŋ** (落ちない)、**ukuŋ** (起きない)、**stuŋ** (捨てない)、

fu:ŋ (呉れない)、/mju:ŋ (見ない)、ju:ŋ (得ない)、
不規則変化/ku:ŋ (来ない)、su:ŋ (しない)、uraŋ (いない)、nja:ŋ (ない)、
命令形/pirijo (行けよ)、kai (買え)、fai (食らえ)、jukui (休め)、n'ivvi (眠れ)、/
mi:rɯ (見ろ)、fi:rɯ (呉れろ)、zziru/iziru (入れろ)、/ku: (来い)、fi:rɯ/afirɯ (し
ろ)、

砂川方言

古代語混合変化は、砂川方言では ukiŋ (起きない) だけが弱変化型であられる以外、
語尾に-uŋ をもつ混合変化型の語形がみられる。古代語弱変化の「見ない」は弱変化型の
mi:ŋ であるが、それ以外の古代語弱変化に対応する語形がえられていないので、砂川方
言の詳細は不明である。

強変化/tubaŋ (飛ばない)、asɪpaŋ (遊ばない)、numaŋ (飲まない)、kugaŋ (漕がない)、
ffaŋ (降らない)、utusaŋ (落とさない)、idasan (出さない)、puraŋ (掘らない)、uvaŋ
(売らない)、kɪsaŋ (切らない)、ka:ŋ (買わない)、fa:ŋ (食わない)、ara:ŋ (洗わな
い)、mura:ŋ (貰わない)、bjo:ŋ (酔わない)

混合変化/urudjaŋ (降りない)、utuŋ (落ちない)、stuŋ (捨てない)、ffudzaŋ (呉れな
い)

弱変化/ukiŋ (起きない)、/mi:ŋ (見ない)、

不規則変化/ku:ŋ (来ない)、

命令形/iki jo: (行けよ)、piri (行け)、kai (買え)、fai (喰らえ) jukui (休め)、nivvi (眠
れ)、/mi:rɯ (見ろ)、ka:kirɯ (かけろ)、ffirɯ/fi:rɯ (呉れろ)、izirujo: / idirujo: (入
れろよ)、/ku: (来い)、

宮国方言

古代語混合変化は、宮国方言では ukiŋ (起きない) だけが弱変化型であられる以外、
語尾に-uŋ をもつ混合変化型の語形がみられる。「蹴らない」は強変化型の kiran である。
古代語弱変化に対応する語形がえられていないので、来間方言の詳細は不明である。

強変化/asɪpaŋ (遊ばない)、nomaŋ (飲まない)、kugaŋ (漕がない)、ikazaŋ (行かな
い)、ffaŋ (降らない)、utusaŋ (落とさない)、idasadza:ŋ (出さない)、motadza:ŋ (持
たない)、poraŋ (掘らない)、kɪsaŋ (切らない)、uvaŋ (売らない)、ɕa:ŋ (食わない)、
ka:ŋ (買わない)、bjo:ŋ (酔わない)、ara:ŋ (洗わない)、mora:ŋ (貰わない)、/kiran
(蹴らない)、

混合変化/uruza:ŋ (降りない)、utuŋ (落ちない)、sutuŋ (捨てない)、fuzzaŋ (縛らな
い)、ɕu:ŋ (呉れない)、ituŋ (出ない)

弱変化／**ukiŋ** (起きない)、
不規則変化／**ku:ŋ** (来ない)、
命令形／**p^hiri** (行け)、**kai** (買え)、**ɸai** (喰らえ)、**jukui** (休め)、**nivvi** (眠れ)、／**miru**
(見ろ)、**fi:ru** (呉れろ)、**sɪturu** (捨てろ)、**ku:** (来い)、

与那覇方言

古代語混合変化は、与那覇方言では語尾に**-uŋ** をもつ混合変化と語尾に**-iŋ** をもつ弱変化があらわれる。古代語弱変化に対応する語形がえられていないので、与那覇方言の詳細は不明である。

強変化／**tuban** (飛ばない)、**kugan** (漕がない)、**ikan** (行かない)、**ffan** (降らない)、**utusan**
(落とさない)、**kiran** (蹴らない)、**kiran** (切らない)、**idasan** (出さない)、**mutan** (持
たない)、**vvan**～**vvadia:n** (売らない)、**ka:n** (買わない)、
混合変化／**urudjan** (降りない)、**utun** (落ちない)、**stun** (捨てない)、**fudja:n** (呉れない)
弱変化／**ukin** (起きない)、
不規則変化／**ku:n**
命令形／**iki** (行け)、**kai** (買え)、**fe:** (喰らえ)、**jukui** (休め)、**nivvi** (眠れ)、／**mi:ru**
(見ろ)、**kakuru** (かけろ)、**ffiru/ firu** (呉れろ)、／**ku:** (来い)、

来間方言

古代語混合変化は、来間方言では語尾に**-uŋ** をもつ混合変化がみられる。「蹴らない」は強変化型の **kiraŋ** である。それ以外の古代語弱変化に対応する語形がえられていないので、来間方言の詳細は不明である。

強変化／**tubaŋ** (飛ばない)、**aspaŋ** (遊ばない)、**numaŋ** (飲まない)、**kugaŋ** (漕がない)、
ikaŋ (行かない)、**utusaŋ** (落とさない)、**idaspaŋ** (出さない)、**mutcaŋ** (持たない)、
praŋ (掘らない)、**sɪmaran** (縛らない)、**ffaŋ** (降らない)、**tssaŋ** (切らない)、**muraŋ**
(貰わない)、**vvaŋ** (売らない)、**fa:ŋ** (食わない)、**ka:ŋ** (買わない)、**ara:ŋ** (洗わない)、
bio:ŋ (酔わない)、／**kiraŋ** (蹴らない)、
混合変化／**uruŋ** (降りない)、**utuŋ** (落ちない)、**ukuŋ** (起きない)、**stuŋ** (捨てない)、
fu:ŋ (呉れない)、
不規則変化／**ku:ŋ** (来ない)、
命令形／**iki** (行け)、**pire** (行け)、**smare** (縛れ)、**idace:** (出せ)、**jarace** (遣らせ)、**ɸi:ce**
(切れ)、**ke:** (買え)、**fe:** (喰らえ)、**jukui/ juke:** (休め)、**nivvi** (眠れ)、／**mi:ru** (見ろ)、
fi:ru (呉れろ)、**stiro** (捨てろ)、**zzero** (入れろ)、／**ku:** (来い)、

久貝方言

古代語の弱変化と混合変化は、久貝方言では語尾に・iŋ、・i:ŋをもつ弱変化である。古代語不規則「しない」も弱変化型の *ʃi:ŋ* である。「蹴らない」「死なない」は強変化である。他の方言で強変化であられる「着ない」「坐らない」も弱変化型の *kiʃiŋ*、*biʒiŋ* である。

強変化／*tubaŋ* (飛ばない)、*aspaŋ* (遊ばない)、*numaŋ* (飲まない)、*kugaŋ* (漕がない)、*ikaŋ* (行かない)、*utasaŋ* (落とさない)、*idasan* (出さない)、*mutaŋ* (持たない)、*puran* (掘らない)、*furaŋ* (降らない)、*ksʷasaŋ* (切らない)、*sɪmaran* (縛らない)、*vvaŋ* (売らない)、*kavvaŋ* (被らない)、*ffaŋ* (閉じない)、*nivvaŋ* (眠らない)、*ka:ŋ* (買わない)、*fa:ŋ* (食わない)、*bja:ŋ* (酔わない)、*ara:ŋ* (洗わない)、*andzaŋ* (言わない)、／*kiraŋ* (蹴らない)、*snaŋ* (死なない)、

弱変化／*uriŋ* (降りない)、*utiŋ* (落ちない)、*ukiŋ* (起きない)、*stiŋ* (捨てない)、*fi:ŋ* (呉れない)、／*zʒiŋ* (得ない)、*kiʃiŋ* (着ない)、*biʒiŋ* (坐ない)、*mi:ŋ* (見ない、いない)、

不規則変化／*ku:ŋ* (来ない)、*ʃi:ŋ* (しない)、*nja:ŋ* (ない)、

命令形／*iki* (行け)、*jukui* (休め)、*kai* (買え)、*idafi* (出せ)、*uri* (居れ)、*kavvi* (被れ)、*ffijo:* (閉じろ)、／*mi:ru* (見ろ)、*fi:ru* (呉れろ)、*kaʃiru* (かけろ)、*kiʃiru* (着ろ)、／*ku:* (来い)、*ʃiru* (しろ)、

島尻方言

古代語の弱変化と混合変化は、島尻方言では語尾に・iŋ、・i:ŋをもつ弱変化であられる。弱変化の「蹴らない」「坐ない」は強変化型であられる。不規則変化の「する」は弱変化型であられる。*ʃiro* > *sru* > *ssu*。

強変化／*tubaŋ* (飛ばない)、*appaŋ* (遊ばない)、*numaŋ* (飲まない)、*kugaŋ* (漕がない)、*ikaŋ* (行かない)、*utusaŋ* (落とさない)、*idasan* (出さない)、*mutaŋ* (持たない)、*puran* (掘らない)、*ffaŋ* (降らない)、*kssaŋ* (切らない)、*fgzzaŋ* (縛らない)、*kavvaŋ* (被らない)、*vva:ŋ* (売らない)、*ffaŋ* (閉じない)、*nivvaŋ* (眠らない)、*azzaŋ* (言わない)、*ka:ŋ* (買わない)、*fa:ŋ* (食わない)、*ara:ŋ* (洗わない)、*bja:ŋ* (酔わない)、／*kiraŋ* (蹴らない)、*bzɪzaŋ* (坐ない)、

弱変化／*uriŋ* (降りない)、*utʃiŋ* (落ちない)、*stʃiŋ* (捨てない)、*fi:ŋ* (呉れない)、*ukiŋ* (起きない)、*sniŋ* (死なない)、／*mi:ŋ* (見ない、いない)、*zʒiŋ* (得ない)、*ʃʃiŋ* (着ない)、

不規則変化／*ku:ŋ* (来ない)、*ʃiŋ* (しない)、*nja:ŋ* (ない)、

命令形／*iki* (行け)、*uki* (置け)、*piri* (行け)、*kai* (買え)、*fai* (喰らえ)、*jukai* (休め)、*nivvi* (眠れ)、／*mi:ru* (見ろ)、*fi:ru* (呉れろ)、*ʃʃiru* (着ろ)、*ku:* (来い)、*ssu* (しろ)、

狩俣方言

古代語の弱変化と混合変化は、狩俣方言では語尾に*-iŋ*、*-i:ŋ*をもつ弱変化であられる。「着ない」「坐ない」「死なない」も弱変化型であられる。不規則変化の「する」は弱変化型で、「居ない」は強変化型の活用形であられる。

強変化／*tubaŋ* (飛ばない)、*asbaŋ* (遊ばない)、*numaŋ* (飲まない)、*kugaŋ* (漕がない)、*ikaŋ* (行かない)、*utasaŋ* (落とさない)、*idasan* (出さない)、*mutaŋ* (持たない)、*puran* (掘らない)、*smaraŋ* (縛らない)、*ffaŋ* (降らない)、*kssaŋ* (切らない)、*kauvaŋ* (被らない)、*ffaŋ* (閉じない)、*uvvaŋ* (売らない)、*niuvaŋ* (眠らない)、*azzaŋ* (言わない)、*ka:ŋ* (買わない)、*ara:ŋ* (洗わない)、*fa:ŋ* (食わない)、／*kiraŋ* (蹴らない)、
弱変化／*uriŋ* (降りない)、*utiŋ* (落ちない)、*ukiŋ* (起きない)、*ŋitiŋ* (捨てない)、*fi:ŋ* (呉れない)、*ŋimiŋ* (閉めない)、*kadzŋiŋ* (かじらない、掘らない)、*sniŋ* (死なない)、*bi:u:ŋ* (酔わない⁷)、／*i:ŋiŋ* (得ない)、*ki:ŋiŋ* (着ない)、*bi:ŋiŋ* (坐ない)、*mi:ŋ* (見ない、いない)、
不規則変化／*ku:ŋ* (来ない)、*a:ŋiŋ* (しない)、*uraŋ* (居ない)、*nja:ŋ* (ない)、
命令形／*iki* (行け)、*uki* (置け)、*ida:ŋi* (出せ)、*kai* (買え)、*ɸai/fai* (喰らえ)、*jukui* (休め)、*niui* (眠れ)、／*mi:ru* (見ろ)、*fi:ru/ffiru* (呉れろ)、*uriru* (降りろ)、*ka:ŋiru* (かけろ)、*ɸimiru* (閉めろ)、*ŋgiru* (帰れ)、*i:ŋiru* (入れろ)、／*ku:* (来い)、*a:ŋiru* (しろ)、

池間方言

古代語の弱変化と混合変化は、池間方言では語尾に*-iŋ*、*-i:ŋ*をもつ弱変化であられる。「蹴らない」「着ない」「坐ない」「死なない」は強変化型であられる。不規則変化の「する」は混合変化型であられる。

強変化／*tubaN* (飛ばない)、*aɸiban* (遊ばない)、*numaN* (飲まない)、*kugaN* (漕がない)、*ikaN* (行かない)、*utuhan* (落とさない)、*idanaN* (出さない)、*mutɸaN* (持たない)、*furadza:N* (掘らない)、*kiraN* (切らない)、*ɸimaɸaN* (縛らない)、*ffaN* (降らない)、*vvaN* (売らない)、*kauvaN* (被らない)、*ttadza:N* (閉じない)、*niivvaN* (眠らない)、*azzaN* (言わない)、*ka:N* (買わない)、*ara:N* (洗わない)、*fa:N* (食べない)、／*kiraN* (蹴らない)、*ttɸaN* (着ない)、*bidzaN* (坐ない)、*ɸinaN* (死なない)、
弱変化／*ukiN* (起きない)、*uriɸa:N* (降りない)、*utiN* (落ちない)、*ŋitiN* (捨てない)、*fi:N* (呉れない)、／*zziN/dɸiN* (得ない)、*bi:u:iN*⁸ (酔わない)、*mi:N* (見ない、いない)、

⁷ *bi:u:ŋ* は、可能動詞の否定形「酔えない」か。

⁸ *bi:u:ŋ* は、可能動詞の否定形「酔えない」か。確認が必要。

不規則変化／ku:N (来ない)、φuN (しない)、nja:N (ない)、
命令形／iki (行け)、jukui (休め)、kai (買え)、nʲivvi/nʲivvi (眠れ)、／mi:ru (見ろ)、
fi:ru (呉れろ)、sītiru (捨てろ)、／ku: (来い)、assu (しろ)、

国仲方言

古代語の弱変化の「見る」は弱変化型の mi:N だが、「着ない」はʔtaN、「坐ない」b₁zan であらわれ、強変化型である。古代語混合変化「起きる」は、弱変化であらわれる。得られた語形がすくなく、きわめて概括的な記述にとどめざるをえない。

強変化／kavvan (被らない)、nivvan (眠らない)、azzaN/aʎzaN (言わない)、／s₁nan (死
なない)、ʔtaN (着ない)、b₁zan (坐ない)、
弱変化／okiNni:⁹ (起きない)、／mi:N (見ない、いない)、
不規則変化／ahoN/asoN (しない)、nja:N (ない)、
命令形／mi:ru (見ろ)、φi:ru (呉れろ)、eimiru (閉めろ)、ko: (来い)、asso (しろ)、

3. 2 否定形のまとめ

動詞活用を調査したすべての地点で調査項目の調査が終了しているわけではなく、えられた語形に制限はあるが、北琉球諸語（とくに沖縄島諸方言）、古代語、宮古語の活用のタイプと比較して、次のことが指摘できよう。

- 1) 宮古語の動詞の活用のタイプには強変化と弱変化と混合変化と不規則変化とがみられる。
- 2) 古代語強変化は、宮古語で安定して強変化であらわれる。
- 3) 古代語弱変化「蹴る」は宮古語では強変化であらわれる。
- 4) 古代語の弱変化「見る」は、弱変化であらわれる下位方言と混合変化であらわれる下位方言がある。
- 5) 古代語の混合変化は、久貝、狩俣、池間、国仲では弱変化であらわれ、保良、砂川、宮国、与那覇、来間では混合変化であらわれる。
- 6) 古代語混合変化「死ぬ」が狩俣、島尻では弱変化であらわれ、保良、久貝、池間では強変化であらわれる¹⁰⁾。

⁹ okiNni:の ni:は、終助詞か。

¹⁰ 本永守靖(1973)によると、宮古語西里方言の snan (死なない)などは強変化型の活用形だが、sniru (死ぬ)や sniriba (死ぬば)など弱変化型の活用形である。また、狩俣が2011年11月に行なった旧上野村野原方言の調査(話者:N.Y氏。男性。昭和18年生)で動作・変化が限界達成直前であることをあらわす形式に snatti: u: (死のうとしている)と、snitti: u: (死のうとしている)の強変化型と弱変化型のふたつの活用形が得られた。前者は、主体の意志的な動作の開始限界達成直前であることをあらわし、後者は、無意志的な変化の終了限界達成直前である

- 7) 古代語弱変化の強変化動詞化が沖縄島諸方言にみられるが、古代語弱変化の「蹴らない」が宮古語全体で強変化化し、同じく古代語「着ない」が保良、島尻、池間で、「座ない」が保良、島尻、池間で強変化化している。その他の地点の方言は語形がえられておらず不明である。
- 8) 古代語混合変化の強変化化 (r 語幹動詞化) が沖縄島諸方言にみられるが、宮古語では強変化化はみられない。
- 9) 久貝、島尻、狩俣では「着ない」「座ない」「得ない」も弱変化であられる。
- 10) 古代語不規則変化「しない」が久貝、狩俣、島尻で弱変化であられ、保良、池間で混合変化であられる。

否定動詞の語彙的な意味で興味ぶかいのが、uz (居る) の否定動詞の現在形には uraŋ (居ない) のほかに、語形上は miz (見る) の否定動詞があらわれる地点が複数あったことである。

16) tunaznna imma mi:ŋ (隣には 犬は いない)。島尻方言

17) tunaznu ja:nna inna mi:ŋ (隣の 家には 犬は いない)。久貝方言

4 過去形

動詞過去形の語尾には強変化、弱変化、混合変化、不規則変化の如何をとわず、ta:, ta, tai, taʔ があらわれる。日本語や北琉球諸語にみられる強変化の語尾にふくまれる t の有声音化がみられないのである。宮古語には tuʔ (鳥)、paʔ (針) などの単語にみられる ri>i の音韻変化と、piru>piʔ (大蒜)、saru>saʔ (申) にみられる ru>z の音韻変化があるので、taʔ, tai, ta:, ta は、tari あるいは taru に由来する。

保良方言

強変化、弱変化、混合変化、不規則変化を問わず、語尾は末尾の z の弱化した-ta:あるいは-ta である。ataʔ (有った) だけ-taʔ がみられる。

強変化 / tubzta: (飛んだ)、asɪpɪta (遊んだ)、kugzta: (漕いだ)、iksta: (行った)、utusta: (落とした)、idasuta: (出した)、mutsɪta (持った)、numta (飲んだ)、fɪmta: (履いた)、puzɪta: (掘った)、fuzta: (降った)、pizta: (行った)、smazta: (縛った)、kssta: (切った)、kavta: (買った)、arɔta (洗った)、fɔta (食べた)、bjurta: (酔った)、kavta: (被った)、niuta: (眠った)、fɔ:ta: (閉じた)、azta: (言った)、vvita: (売った)、

ことをあらわす。sn (死ぬ) がどの活用のタイプに属すのか、どの活用形が弱変化型なのかはいろいろな活用形を調査しなければならない。下位方言によって混合変化のタイプに変種があることは興味ぶかい。何故このようなことがおきたのかのこの解明とあわせて、今後の課題である。

kssta: (着た)、kizta: (蹴った)、fttsta: (縛った)、bz:ta: (坐た)、snta: (死んだ)、
混合変化/urita: (降りた)、utçita: (落ちた)、steita: (捨てた)、ffita: (呉れた)、bakita:
(分けた)、pingita (逃げた)、ukita: (起きた)、/mi:ta: (見た)、i:ta: (得た)、
不規則変化/ksta: (来た)、sı:ta: (した)、ataı (有った)、uta: (居た)、

砂川方言

強変化、弱変化、混合変化、不規則変化を問わず、語尾は-ta^{zı}である。一部の語形に-ta:
が並存している。

強変化/tuv^{zı}ta^{zı}~tub^{zı}ta^{zı} (飛んだ)、asıp^{sı}ta^{zı} (遊んだ)、iksıta^{zı}~iksta: (行った)、
kug^{zı}ta^{zı} (漕いだ)、utušta^{zı}~utušta: (落とした)、idasıta^{zı} (出した)、mutsıta^{zı}
(持った)、numta^{zı} (飲んだ)、funta^{zı} (履いた)、pu^{zı}ta^{zı} (掘った)、muduri pi^{zı}ta^{zı}
(戻って行った)、fıta^{zı}~fıta: (降った)、kaut^{zı} (被った)、kaut^{zı} (買った)、fo:ta^{zı}
~faut^{zı}~fout^{zı} (食べた)、muraut^{zı} (貰った)、bi:ta^{zı} (酔った)、araut^{zı} (洗
った)、vıta^{zı} (売った)、ksta^{zı}~ksı:ta^{zı} (切った)、sıma^{zı}ta^{zı} (縛った)、ksıta^{zı} (蹴
った)、
混合変化/urita:~urita^{zı} (降りた)、utita^{zı}~utita: (落ちた)、pingita: (逃げた)、stita^{zı}
~stita: (捨てた)、ffita^{zı} (呉れた) bakita^{zı} (分けた)、pingita^{zı} (逃げた)、
不規則変化/sıta^{zı} (した)、ksıta^{zı}~ksıta:~ksı:ta^{zı} (来た)、kugı^kstaı~kugı^{zı}staı (漕
いで来た)、

宮国方言

強変化、弱変化、混合変化、不規則変化を問わず、語尾は-ta:である。

強変化/asıp^hıta: (遊んだ)、u:gzıta: (泳いだ)、iksta:/ikıta: (行った)、utušta: (落と
した)、idacita/idasıta (出した)、pirasıta: (行かせた)、moçıta: (持った)、numta:
(飲んだ)、fuzta: (降った)、pozta (掘った)、muduıta: (戻った)、kırta: (切った)、
naka^{zı}ta: (分けた)、fuzta:/fızta: (縛った)、kizta: (蹴った)、kaut^{zı} (買った)、øoot^{zı}:
(食べた)、moraut^{zı}:/moroot^{zı}: (貰った)、b^jo:ta: (酔った)、araut^{zı}: (洗った)、urta:
/uvta:/uuta: (売った)、
混合変化/urita: (降りた)、uçıta: (落ちた)、sııtita: (捨てた) øiita: (呉れた)、
p^hıngita:/øıngita: (逃げた)、
不規則変化/kırta:/kırta: (来た)、kugı^ksta: (漕いできた)、kugiuta (漕いでいた)、

与那覇方言

強変化、弱変化、混合変化、不規則変化を問わず、語尾は-ta:である。

強変化／*tubɪtaː/tubɪtan* (飛んだ)、*appɪtaː* (遊んだ)、*ik^sɪtaː* (行った)、*kugɪtaː* (漕いだ)、*utusɪtaː* (落とした)、*idasɪtaː* (出した)、*mutsɪtaː* (持った)、*numtaː* (飲んだ)、*ffuɪtaː* (降った)、*puztaː* (掘った)、*piːtaː* (行った)、*kɪsɪtaː* (切った)、*koːtaː* (買った)、*aroːtaː* (洗った)、*foːtaː* (食べた)、*bjuːtaː* (酔った)、*uːtaː/uritaː* (売った)、*kizɪtaː* (蹴った)、*sɪma^zɪtaː* (縛った)、

混合変化／*uritaː* (降りた)、*utitaː* (落ちた)、*suɪtaː* (捨てた)、*fiːtaː* (呉れた)、*bakitaː* (分けた)、

弱変化／*zzitaː* (得た)、

不規則変化／*kstaː/kɪsɪtaː* (来た)、*kugɪdu sɪtaː* (漕ぎづした)、*uːdusɪtaː* (売りづした)、*bjuːi utaː* (酔っていた)、*tubɪdu sɪtaː* (飛びづした)、

来間方言

強変化、混合変化、不規則変化を問わず、語尾は *-taɪ* である。古代語弱変化に対応する動詞の語形が得られていない。強変化の語尾は *-ztaɪ*、*-ɪtaɪ*、*-taɪ* であり、混合変化の語尾は *-taɪ* である。

強変化／*tubztaɪ/tubztaɪ* (飛んだ)、*aspɪtaɪ* (遊んだ)、*numutaɪ*¹¹ (飲んだ)、*kudztaɪ* (漕いだ)、*istaɪ* (行った)、*piɪtaɪ/piɪtaɪ* (行った)、*utuɪstaz/utuɪstaz* (落とした)、*idastaɪ* (出した)、*puztaɪ* (掘った)、*sɪmaɪtaɪ/smaɪtaɪ* (縛った)、*fftaɪ* (降った)、*tsɪtaɪ/tsɪstaz* (切った)、*muroːtaɪ* (貰った)、*uːtaɪ* (売った)、*foːtaɪ* (食った)、*koːtaɪ* (買った)、*aroːtaɪ* (洗った)、*bjuːtaɪ* (酔った)、*kizɪtaɪ/kizɪtaɪ* (蹴った)、

混合変化／*uritaɪ/uritaɪ* (降りた)、*utitaɪ* (落ちた)、*stitaɪ/stitaɪ* (捨てた)、*fiːtaɪ* (呉れた)、*bakitaɪ* (分けた)、*pingitaɪ* (逃げた)、

不規則変化／*tsataɪ/tsataɪ* (来た)、*kugitaɪ* (漕いできた)、*uritaɪ/tsataɪ* (降りてきた)、*muraitaɪ* (貰ってきた)、*ik^juritaɪ/ik^juritaɪ* (行っていた)、*mm^jantaɪ* (いらっしやった)、*uːgi taɪ* (泳いできた)

久貝方言

強変化、弱変化、不規則変化を問わず、語末は *-taː* である。強変化の語尾は *-staː*、*-ɪtaː*、*-taː*、弱変化の語尾は *-taː* である。

強変化／*aspstaː* (遊んだ)、*kug^zɪtaː* (漕いだ)、*ik^sɪtaː* (行った)、*utastaː* (落とした)、*idastaː* (出した)、*mutstaː* (持った)、*numtaː* (飲んだ)、*fumtaː* (履いた)、*fu^zɪtaː* (降

¹¹ 他の下位方言の強変化 *m* 語幹動詞のばあい、語尾に母音があらわれないが、ここでは *u* があらわれている。確認が必要か。

った)、**puzta:** (掘った)、**pi:ta:** (行った)、**k^sɿta:** (切った)、**ki^zɿta:/ki^zɿta:** (蹴った)、**sɿma:ɿta:** (縛った)、**naka:zta:** (分けた)、**ko:ta:** (買った)、**aro:ta:** (洗った)、**fo:ta:** (食べた)、**mo:ro:ta:** (貰った)、**bu:ɿta:** (酔った)、**vi:ta:** (売った)、**ni:vi:ta:** (眠った)、**ka:u:ta:** (被った)、**ffta:** (閉じた)、**anta:** (言った)、**snta:** (死んだ)、
弱変化/**u:ri:ta:** (降りた)、**u:ti:ta:** (落ちた)、**u:ki:ta:** (起きた)、**sɿ:ti:ta:** (捨てた)、**ki:ci:ta:** (着た)、**fi:ta:** (呉れた)、**smi:ta:** (洗った)、**pi:ŋgi:pi:ta:** (逃げた)、**/mi:ta:** (見た)、**zzita:** (得た)、**bi:zi:ta:** (坐った)、
不規則変化/**k^sɿ:ta:** (来た)、**ku:gi:k^sɿ:ta:** (漕いで来た)、**sta:** (した)、**uta:** (居た)、**ata:** (有った)、**ari:uta:~ari:u:ta:** (有った)、**bu:ɿ:u:ta:** (酔っていた)、**tat:ci:u:ta:** (立っていた)、**ni:vi:u:ta:** (眠っていた)、

島尻方言

島尻方言の過去形の語末は、**ta:**がおおく、**ta**、**taz** もあらわれている。強変化の語尾は**-sta:**、**-zta:**、**-u:ta:**、**-ta:**、弱変化の語尾は**-taz** である。

強変化/**tubzta:** (飛んだ)、**appsta:** (遊んだ)、**ku:gzta:** (漕いだ)、**iksta:** (行った)、**u:tu:sta:/u:tu:sta:** (落とした)、**idasta:** (出した)、**mu:tu:sta:** (持った)、**nu:nu:ta:** (飲んだ)、**fu:nu:ta:/fu:nu:ta:** (履いた)、**puzta:** (掘った)、**ffta:/ffu:ta:** (降った)、**pi:zta:** (行った)、**kssta:** (切った)、**ka:u:ta:** (買った)、**ara:u:ta:** (洗った)、**fa:u:ta:** (食べた)、**bu:ɿ:taz** (酔った)、**ka:vi:ta:** (被った)、**ni:vi:ta:** (眠った)、**ffta:/ffu:ta:** (閉じた)、**azta:** (言った)、**vi:ta:/u:vi:ta:** (売った)、**fgzta:** (縛った)、**ki:zta:** (蹴った)、**bu:zi:ta:** (坐た)、**snta:** (死んだ)、
弱変化/**u:ri:ta:** (降りた)、**u:ti:ci:ta:** (落ちた)、**st:ci:ta:** (捨てた)、**fi:ta:** (呉れた)、**ba:ki:taz** (分けた)、**u:ki:taz/u:ki:ta:** (起きた)、**/mi:ta:** (見た)、**zzitaz** (得た)、**ʃfi:taz** (着た)、
不規則変化/**ssta:** (来た)、**ssta:** (した)、**ata:** (有った)、**u:ta:/u:ta:** (居た)、

狩俣方言

狩俣方言の過去形の語尾には、**-taz** のほかに**-daz** があらわれている。**nundaz** (飲んだ) の **daz** は音便化したようにもみえるが、**-daz** が強変化 **asudaz** (遊んだ) と弱変化 **uridaz** (降った)、**utidaz** (落ちた) の別なくあらわれていること、**sntaz/sndaz** (死んだ)、**ci:mi:taz/ci:mi:daz** (閉めた) のように同じ動詞で**-taz** と**-daz** の変種がみられることから、この有声音化の減少は音便ではなく、音声的な変種であるとかんがえる。したがって、狩俣方言の強変化の語尾は**-itaz** と**-taz**、弱変化の語尾は**-taz** である。

強変化/**tubi:taz/tu:tu:taz** (飛んだ)、**asudaz** (遊んだ)、**ku:gi:taz/ku:tu:taz** (漕いだ)、**iftaz/ikitaz** (行った)、**u:ta:staz** (落とした)、**idastaz** (出した)、**mu:tu:staz** (持った)、**nundaz** (飲んだ)、**puztaz** (掘った)、**ffutaz** (降った)、**ksstaz** (切った)、**ka:zta:/ko:ta:/ko:taz** (買

った)、*aro:daz* (洗った)、*fo:ɪtaz* (食べた)、*bjɔ:ɹtaz* (酔った)、*kautaz* (被った)、*njɪutaz* (眠った)、*ffitaz* (閉じた)、*aztaz* (言った)、*vɪtaz* (売った)、*ks:daz* (蹴った)、*smaztaz* (縛った)、*sntaz/sndaz*¹² (死んだ)、
弱変化/*uridaz* (降りた)、*utidaz* (落ちた)、*ɛitidaz* (捨てた)、*fɪ:taz* (呉れた)、*ŋgidaz* (帰った)、*taskarɪtaz* (助かった)、*ukitaz* (起きた)、*ɛimitaz/ɛimidaz* (閉めた)、/*mi:daz* (見た)、*zzitaz* (得た)、*kiitaz* (着た)、*bizitaz* (坐た)、
不規則変化/*ksstaz* (来た)、*kugiftaz* (漕いできた)、*astaz* (した)、*ataz* (有った)、*utaz* (居た)、

池間方言

池間方言の過去形の語尾は、強変化、弱変化、不規則変化のいずれも *-tai* である。

強変化/*acɪbitai*~*acɪ:ɹtai* (遊んだ)、*kugitai* (漕いだ)、*ifutai*~*ikitai* (行った)、*utacɪtai* (落とした)、*idacɪtai* (出した)、*muttai* (持った)、*nuntai* (飲んだ)、*mmitai* (履いた)、*fɪ:tai* (降った)、*fuitai* (掘った)、*muduitai* (戻った)、*hatai* (行った)、*kirɪtai* (切った)、*ɛɪmarɪtai* (縛った)、*kautai*~*kautai*~*kaitai* (買った)、*vvitai* (売った)、*faitai*~*fautai*~*fautai* (食べた)、*bjɔ:ɹitai* (酔った)、*araitai* (洗った)、*aitai* (言った)、*kavvitai* (被った)、*ffitai* (閉じた)、*n^ɹɪ:ɹtai* (眠った)、*taskaitai* (助かった)、*kiɹtai* (蹴った)、*ttɛaddaŋ* (切れなかった¹³)、
弱変化/*ukitai* (起きた)、*urɪtai* (降りた)、*utɛɪta:* (落ちた)、*bakɪtai* (分けた)、*uɔɪmitai* (埋めた)、*piŋgita* (逃げた)、*fɪ:tai* (呉れた)、/*miɹtai* (見た)、*tsɪitai*~*ttitai* (着た)、*biɹtai* (坐た)、*ddzitai* (得た)、
不規則変化/*ku:ŋ* (来ない)、*ɸuŋ* (しない)、*nɪa:ŋ* (ない)、
不規則変化/*ttai* (来た)、*asɪtai/acɪtai* (した)、*aruɹtai* (有った)、*uruɹtai* (居た)、

国仲方言

得られた語形はすくないが、強変化、混合変化、弱変化、不規則変化のいずれも語末に *-tal* が主としてみられ、一部に *ta:*がある。

強変化/*ŋgɪtal* (行った)、*p^ɹalɹtal* (行った)、*kavɹtal* (被った)、*ɸumɹtal* (履いた)、*nɪvtal* (眠った)、*sɪŋtal* (死んだ)、
混合変化/*ɛimeɹtal* (閉じた)、*okɪtal* (起きた)、

¹² 過去形の *sntaz/sndaz* (死んだ) は、強変化型の活用形だが、否定形 *sniŋ* (死なない) は弱変化の活用形である。混合変化であるが、古代語とはことなる混合のしかたをしている。

¹³ 日本語訳は「切れなかった」となっているが、活用は強変化型のようなのである。「切らなかった」か。

弱変化／*mirta:l* (見た)、*tsɪ:ta:* (着た)、*bɪ:ta:/bɪzta:* (坐た)、
不規則変化／*asta:l* (した)、*ata:l* (有った)、*ota:l* (居た)、*tacii ota:l* (立っていた)、

4. 1 過去形の考察(1) - 音便の有無

日本語において平安時代の動詞語幹に発生した音便とよばれる音韻変化が『おもろさうし』および北琉球諸語にもみられる。音便とは、強変化の語幹末子音と語尾が音韻変化して再編されて替わり語幹をもつことをいう。替わり語幹をもつ活用形は、過去形、シテ中止形であり、シテ中止形を要素にもつ派生形式にもみられる。

宮古語の強変化の *k* 語幹動詞、*g* 語幹動詞のイ音便も、*b* 語幹動詞の撥音便も、*t* 語幹動詞、*r* 語幹動詞の促音便もみられない。北琉球諸語にみられる *s* 語幹動詞のイ音便もみられない。*m* 語幹動詞のばあい、語尾頭母音 *i* の音消失はみられるが、撥音便はみられない。そして、北琉球諸語の強変化の脱落音便もみられない。宮古語のばあい、音便語幹を設定する必要はないことがわかる。

おもろさうしの *b* 語幹動詞、*m* 語幹動詞のばあい、語幹末子音とシテ中止形の語尾 *ite* の頭母音 *i* が脱落し、語尾 *t* が有声音化した *de* に変化している。*tsu-de* つで < *tsuNde* つんで < *tsum-ite* つみて (積んで)。*era-de* えらで < *eraNde* えらんで < *erab-ite* えらびて (選んで)。語幹と語尾の境界の音節 *mi*、*bi* が融合して撥音 *N* に変化し語尾の *t* を有声音化させたのち脱落したものと推定される。*mi* > *N*、*bi* > *N* の変化は口蓋音化が発生するまえにおきている。

r 語幹動詞のばあい、語幹末子音と語尾頭母音が脱落している。語幹末子音 *r* とシテ中止形の語尾 *ite* の頭母音 *i* が脱落しているが、語尾 *t* の有声音化はみられない。*ino-te* いのて < *inoQte* いのって < *inor-ite* いのりて (祈って)。口蓋音化が発生するまえに語尾頭母音 *i* の脱落して促音が発生した、のちに促音も脱落したとみられる。

語幹末子音が *w* のばあい語幹末子音と語尾頭母音が融合して *u* 音便化して、さらに脱落している。古代語ハ行子音の *p* の語中での摩擦音化、有声音化、唇音退化 (ハ行転呼音) と *u* 音便化がおきたものとかんがえる。*wara-te* わらて < *waraute* わらうて < *waraw-ite* わらひて (笑って)。*ri* > *Q* の変化も *wi* > *u* の変化も口蓋音化が発生するまえにおきている。

k 語幹動詞、*s* 語幹動詞、*g* 語幹動詞のばあい、語幹末子音の消失と語尾頭母音 *i* 脱落し語尾頭子音 *t* が口蓋化した *tɕ* に変化している。*da-tɕe* だちえ < *da-itɕe* だいちえ < *dak-ite* だきて (抱いて)。*wata-tɕe* わたちえ < *wata-itɕe* わたいちえ < *wataɕ-ite* わたして (渡して)。*ko-dze* こじえ < *ko-idze* こいじえ < *kog-ite* こぎて (漕いで)。語幹末子音の脱落した脱落音便がみられる。なお、*g* のばあい語尾頭子音が有声音化してジェ *dze* に変化しているのは、イ音便化のまえに有声音化していたためである。

t 語幹動詞のばあい、語尾の *t* が口蓋音化している。*motɕ-itɕe* もちちえ < *motɕ-ite* もちて (持つて)。語尾頭子音 *i* の影響による口蓋音化と破擦音化はみられるが、いかなる音便もみられない。

語幹末が母音になる弱変化は、いかなる音便もおきていない。ore-te おれて（降りて）。ake-te あけて（開けて）。なお、語幹末母音が i になる動詞は、i の影響をうけて語尾にふくまれる t の口蓋化がおきている。mi-tce みちえ < mi-te みて（見て）。mitci-tce みちちえ < mitcite みちて（満ちて）。

『おもろさうし』においてみられる音便現象は、北琉球諸語にひきつがれている。

tudi（飛んで）、iradi（選んで）、nudi（飲んで）、
huti（降って）、huti（掘って）、?arati（洗って）、warati（笑って）
datfi（抱いて）、katfi（書いて）、kudzgi（漕いで）、tudgi（砥いで）
ukutfi（起こして）、watatfi（渡して）、
nitfi（煮て）、n:tfi（見て）

なぜ宮古語が音便語幹を有しないのか、それは宮古語のふるさを意味するのか、まだ断定はできない。しかし少なくとも、南琉球諸語では音便現象がみられないので、琉球祖語から南琉球諸語が分岐したときにはまだ音便はおきておらず、「おもろさうし」が編纂された 1500 年代にすでに音便が発生していたことを考慮すると、『おもろさうし』の書かれる以前には北琉球諸語と南琉球諸語が分岐し、分岐後に北琉球諸語で音便がおきたとみることができる。

4. 2 過去形の考察（2）—語幹にあらわれるシ中止形

過去形の注目すべきもうひとつの点は、過去形が外形的にはシ中止形に ta, ta:, tai, taʔi が接続していることである。これは、音便現象が発生する以前の古代語のシタリ（した）、ノミタリ（飲んだ）、ウケタリ（受けた）とおなじである。もちろん、宮古語においてはさまざまな音韻変化がおきており、古代語のシ中止形がそのまま保存されているわけではない。

シ中止形が本来の連用形の用法ではほとんどあられわれず、形つくりや単語つくりの要素としてしかみられないので、宮古語の過去形の語幹部分をみることで、宮古語のシ中止形の形式がどのような音声形式であられるかを知ることができる。

かりまたしげひさ（1999）でものべたが、宮古語の平良方言や保良方言など宮古島の中央部から南部地域の下位方言の強変化の b 語幹動詞、k 語幹動詞、g 語幹動詞の代表形は、シ中止形に由来する形式が表われる。このことから宮古語の代表形は、シ中止形に由来する形式の可能性があるとして論じた。しかし、後述するように狩俣方言や池間方言にはスル終止形あるいはスル連体形に由来する形式もあらわれる。シ中止形の形式を確認することのできる過去形は、宮古語の動詞代表形の起源を検討するうえでも重要である。

古代日本語の強変化の終止形叙述法断定非過去形（以下、ス終止形）と連体形非過去（以下、スル連体形）はホモニムなので、保良方言の kau（買う）、arau（洗う）、島尻方言の ko:（買う）、aro:（洗う）、などの *w 語幹動詞がス終止形とスル連体形のいずれに由来するかを特定出来ない。宮古語強変化の m 語幹動詞、s 語幹動詞、t 語幹動詞、r 語幹動詞は、古代

語のシ中止形、ス終止形、スル連体形のいずれに由来するか特定することができない。

古代語の弱変化も宮古語の弱変化も、シ中止形とス終止形は形式がことなるが、ス終止形とスル連体形は古代語でも宮古語でもホモニムであり、ス終止形とスル連体形のいずれに由来するかを特定できない。いっぽう、古代語の混合変化は、シ中止形とス終止形とスル連体形の形式がことなり、宮古語でもそのあらわれ方がことなるので、古代語混合変化に対応する宮古語の動詞について検討することは重要である。

以下、強変化と弱変化と混合変化にわけて過去形を検討するが、強変化は、b 語幹動詞、k 語幹動詞、g 語幹動詞、*w 語幹動詞のあらわれかたをみる。

4. 2. 1 b 語幹動詞

b 語幹動詞の過去形、「飛んだ」が調査票にあがっているが、宮国、久貝、池間では「遊んだ」の過去形しかえられていない。どの地点にもシ中止形*tobi、*asubi に由来する形式がみられるが、狩俣、池間は、シ中止形由来形式のほかに、ス終止形あるいはスル連体形*tobu、*asubu に由来する tuv と acu:があらわれている。

tubzta: (保良)、tuv^z1ta^z1~tub^z1ta^z1 (砂川)、tub1ta:/tub1tan (与那覇)、tubz1ta:/tubz1tan (来間)、tubzta: (島尻)、tubitaz/tuvtaz (狩俣)、as1p^h1ta: (宮国)、aspsta: (久貝)、acibitai~acu:tai (池間)

4. 2. 2 g 語幹動詞

b 語幹動詞の過去形は、「漕いだ」が調査票にあがっているが、宮国では「泳いだ」の過去形しかえられていない。どの地点にもシ中止形*kogi、*ojogi に由来する形式がみられるが、狩俣では、シ中止形由来形式のほかに、ス終止形あるいはスル連体形*kogu に由来する kuv もあらわれている。

kugzta: (保良)、kug^z1ta^z1 (砂川)、kug1ta: (与那覇)、kudzta1 (来間)、kug^z1ta: (久貝)、kugzta: (島尻)、kugitaz/kuvtaz (狩俣)、kugitai (池間)、u:93:ta: (宮国)、

4. 2. 3 k 語幹動詞

k 語幹動詞の過去形は、「行った」が調査票にあがっている。どの地点にもシ中止形*iki がみられるが、狩俣、池間は、シ中止形由来形式のほかに、ス終止形あるいはスル連体形*iku に由来する if があらわれている。

iksta: (保良)、iks1ta^z1~iksta: (砂川)、iksta:/ik1ta: (宮国)、ik^s1ta: (与那覇)、i1sta1 (来間)、ik^s1ta: (久貝)、iksta: (島尻)、iftaz/ikitaz (狩俣)、ifutai~ikitai (池間)、

4. 2. 4 *w 語幹動詞

*w 語幹動詞の過去形は、「買った」「食らった」「洗った」「酔った」「言った」が調査票にあがっている。「買った」の語形をみる。どの地点にもス終止形あるいはスル連体形の *kawu に由来する kau、あるいは ko:がみられる。狩俣、池間は、ス終止形あるいはスル連体形由来形式のほかに、シ中止形 *kawi に由来する kai があらわれている。

kauta: (保良)、kauta²¹ (砂川)、kauta: (宮国)、korta: (与那覇)、korta¹ (来間)、korta: (久貝)、kauta: (島尻)、kaztaz/korta:/ kōtaz (狩俣)、kautai~kautai~kaitai (池間)、

4. 2. 5 弱変化

弱変化の過去形は、「見た」「着た」「蹴った」「得た」「坐た」が調査票にあがっている。すべての地点で「蹴る」は強変化であらわれ、「着た」も強変化であられる地点がすくなくない。ここでは「見た」をあげるが、与那覇は「得た」をあげる。砂川、宮国、来間は弱変化がえられていない。「見た」「得た」にかぎらず得られた弱変化の過去形ではシ中止形に由来する形式があらわれている。

mita: (保良)、mita: (久貝)、mita: (島尻)、mi:daz (狩俣)、mitai (池間)、mital (国仲)、zzita: (与那覇)、

4. 2. 6 混合変化

混合変化の過去形は、「降りた」「落ちた」「捨てた」「呉れた」「起きた」「が調査票にあがっている。ここでは「起きた」を検討するが、砂川、宮国、与那覇、来間では「起きた」がえられていないので、「落ちた」をあげる。どの地点もシ中止形 *oke、*ote に由来する形式がみられる。「起きた」「落ちた」にかぎらず、混合変化はシ中止形に由来する形式があらわれている。

古代語の混合変化は、シ中止形の語幹末の母音が i があらわれるタイプ（「上二段」）と e があらわれるタイプ（「下二段」）があるが、琉球諸語の混合変化は、母音 e のあらわれるタイプしかみられない。

ukita: (保良)、utita²¹~utita: (砂川)、ucita: (宮国)、utita: (与那覇)、uti¹taz (来間)、ukita: (久貝)、ukitaz/ukita: (島尻)、ukitaz (狩俣)、ukitai (池間)、okital (国仲)、

狩俣方言、池間方言以外の下位方言では b 語幹動詞、g 語幹動詞、k 語幹動詞にシ中止形があらわれるのに対して、狩俣方言、池間方言では、シ中止形とス終止形（あるいはスル連体形）に由来する 2 形式が並存している。*w 語幹動詞ではス終止形（あるいはスル連体形）に由来する形式があらわれている。また、混合変化と弱変化は、いずれの地点もシ中止形に

由来する形式があらわれている。

なぜ狩俣方言、池間方言の g 語幹動詞、k 語幹動詞にはシ中止形に由来する形式の期待される場所にス終止形（あるいはスル連体形）に由来する形式があらわれるのか、なぜ*w 語幹動詞は、シ中止形に由来する形式の期待される場所にス終止形（あるいはスル連体形）に由来する形式があらわれるのか、代表形の形式とあわせて検討が必要であろう。

5 代表形

古代語の強変化と弱変化は、シ中止形とス終止形の形式はことなるが、ス終止形とスル連体形はホモニムになる。古代語の「有る」「居る」はス終止形とスル連体形はことなるが、シ中止形とス終止形はホモニムになる。シ中止形、ス終止形、スル連体形の3者がことなるのは、混合変化と「死ぬ」「来る」「する」である。

宮古語のばあい、語幹末が k、g、b、*w になる強変化の代表形は、シ中止形由来形式なのか、ス終止形あるいはスル連体形に由来する形式なのかを判別できるが、ス終止形あるいはスル連体形のいずれに由来するのか判別できない。mi>m、mu>m、si>s、su>s、tsi>ts、tsu>ts、ri>z、ru>z などの音韻変化がおきているので、語幹末が m、s、ts、r になる強変化、および、不規則変化の「する」「居る」「有る」は、代表形の形式がシ中止形、ス終止形、スル連体形のどれに由来するかを判別できない。強変化化した sn（死ぬ）も ni>n、nu>n の音韻変化があるので、その由来形式の判別がむづかしい。弱変化と不規則変化の「来る」は、シ中止形由来なのか、ス終止形由来なのか判別できるが、ス終止形由来なのかスル連体形由来なのかを判別できない。混合変化だけが、シ中止形由来なのか、ス終止形由来なのか、スル連体形由来なのかを判別できる。

沖縄島方言の焦点化助辞をふくむ強調文は、文末に連体形とホモニムの強調形があらわれて、du 無しの文の代表形とことなる形式があらわれるが、宮古語のばあい、焦点化助辞=du の有無にかかわらず、文末の述語形式はおなじ形があらわれる¹⁴。したがって、本報告では=du の有無を無視して代表形の語形をあげる。

- 18) paʔume: taʔame: tubz (鳩も鷹も飛ぶ)。(来間)
- 19) taʔanudu tubz (鷹が飛ぶ)。(来間)
- 20) sarumai ki:kara utei. (猿も木から落ちる)。(保良)
- 21) m:na umandu uri. (みんなそこに降りる)。(保良)
- 22) maznudu ama:tta ari uz¹⁵. (米がたくさん有っている)。(島尻)
- 23) ssuznu arittei taskari: uz. (薬があつて助かっている)。(島尻)

¹⁴ かりまたしげひさ (2011) でも焦点化助辞の有無が終止形の活用形を支配していないことをのべている。

¹⁵ az (有る) のアリ中止形に存在動詞 uz を組み合わせた形式の ari uz (有っている) は、物の一時的なアクチュアルな存在をあらわす。今後の詳細な確認と検討が必要である。

保良方言

保良方言の代表形は、強変化 (**tubz** (飛ぶ) など) も混合変化 (**uki** (起きる) など) も弱変化 (**k^s₁**: (着る) など) も不規則変化 **k^s₁**: (来る) もシ中止形由来形式があらわれている。強変化の*w 語幹動詞 (**k^hav** (買う) など) はス終止形由来形式、あるいはスル連体形由来形式である。**s₁ŋ₁~s₁ŋ₁** (死ぬ) は強変化のシ中止形由来形式、あるいはスル連体形由来形式である。

強変化 / **tubz** (飛ぶ)、**as₁p^s₁~as₁b₁** (遊ぶ)、**kugz** (漕ぐ)、**iks** (行く)、**piz** (行く)、**utus~utus₁** (落とす)、**idas₁** (出す)、**muts₁** (持つ)、**num** (飲む)、**puz₁** (掘る)、**fu_z** (降る)、**k^s₁**: (切る)、**ftts** (縛って)、**smaz** (縛る)、**k^hav** (買う)、**f_ɔv** (食べる)、**ar_ɔv** (洗う)、**bju:** (酔う)、**kav~kaf** (被る)、**fu:** (閉じる)、**niv** (眠る)、**az** (言う)、**vv₁** (売る)、**s₁ŋ₁~s₁ŋ₁** (死ぬ)、 / **kiz** (蹴る)、**k^s₁**: (着る)、**b^z₁**: (坐る)、
混合変化 / **stei** (捨てる)、**uri** (降りる)、**utei** (落ちる)、**ffi:** (呉れる)、**uki** (起きる)、 / **mi:** (見る)、**i:** (得る)、
不規則 / **k^s₁**: (来る)、**s₁**: (する)、**uz~u:** (居る)、**a₁** (有る)、**n^ha:ŋ** (無い)、

砂川方言

砂川方言の強変化 (**asip^si** (遊ぶ) など) と不規則変化 **ks₁/ks^z₁**: (来る) は、シ中止形由来形式である。混合変化は語例はすくないが、**sti** (捨てる) はシ中止形由来形式のようである。弱変化は語例がえられていない。強変化の*w 語幹動詞 (**kau** (買う) など) はス終止形由来形式、あるいはスル連体形由来形式である。

強変化 / **asip^si** (遊ぶ)、**kugu^s/kugu^z**¹⁶ (漕ぐ)、**ik^s/ik^z** (行く)、**fu^z** (降る)、**utus₁** (落とす)、**idas₁** (出す)、**muts₁** (持つ)、**ks^z** (切る)、**s₁mari¹⁷** (縛る)、**pu^zi** (掘る)、**num** (飲む)、**kau** (買う)、**fou/fau** (食べる)、**arau** (洗う)、**murau** (貰う)、**bju:** (酔う)、**kav** (被る)、**v:/v_ɔv** (売る)、**ki^z** (蹴る)、
混合変化 / **sti** (捨てる)、**urit_ɕa:** (降りるって・伝聞か)、**utidu s₁/s^z₁** (落ちゾする)、
弱変化 / 語例なし
不規則 / **ks₁/ks^z₁**: (来る)、**s₁/s^z₁** (する)、**u^z** (居る)、

宮国方言

宮国方言の強変化 (**ik^si** (行く) など) と不規則変化 **ki:** (来る) は、シ中止形由来形式である。混合変化は語例はすくないが、**uci** (落ちる) はシ中止形由来形式のようである。弱変

¹⁶ 得られた語形からは*kogoru、あるいは*kogoriが推定される。

¹⁷ s₁mariは「縛れ」か。

化は語例がえられていない。強変化の*w語幹動詞(kau(買う)など)はス終止形由来形式、あるいはスル連体形由来形式である。

強変化/butuki_i(飛ぶ)、kugi(漕ぐ)、ik^s_i(行く)、fu_n(降る)、utu_{su}(落とす)、idaci_i(出す)、k_isi(切る)、mo_{ts}_i(持つ)、kau(買う)、arau(洗う)、 ϕ au/ ϕ oo(食べる)、
b^lu: du_s_i(酔いづする)、u:/uv(売る)、kiz(蹴る)、
混合変化/s_iciu¹⁸(捨てる)、uriru¹⁹(降りる)、uci(落ちる)、 ϕ i:(呉れる)
弱変化/語例なし
不規則/k_i:(来る)、u:(居る)、

与那覇方言

与那覇方言の強変化(kug_n(漕ぐ)など)と不規則変化 k_ls_n(来る)は、シ中止形由来形式である。混合変化は語例はすくないが、uti:(落ちる)はシ中止形由来形式で、suti^z_n(捨てる)は、スル連体形由来形式のようである。弱変化は語例がえられていない。強変化の*w語幹動詞(ko:(買う)など)はス終止形由来形式、あるいはスル連体形由来形式である。

強変化/tub_ndu s_n(飛びづする)、kug_n(漕ぐ)、ik^s_n(行く)、utu_s_n(落とす)、idas_n(出す)、muts_n(持つ)、num(飲む)、puz_n(掘る)、ff_n(降る)、k_ls_n(切る)、s_nma_n(縛る)、ko:(買う)、fo:(食べる)、aro:(洗う)、bj_u:(酔う)、k_l:dusu/kiz_n(蹴る)、
混合変化/suti^z_n(捨てる)、uriru(降りる)、uti:(落ちる)
弱変化/語例なし
不規則/k_ls_n(来る)、s_n(する)、u_n(居る)、

来間方言

来間方言の強変化(tubz_i(飛ぶ)など)と不規則変化 ts_n(来る)は、シ中止形由来形式である。混合変化(uriz_n(降りる)など)はスル連体形由来形式である。強変化の*w語幹動詞(ko:(買う)など)はス終止形由来形式、あるいはスル連体形由来形式である。

強変化/tubz_i(飛ぶ)、aspi²⁰(遊ぶ)、kudz_n(漕ぐ)、it_s/it_s_n(行く)、utu_s_n(落とす)、idace_i²¹(出す)、mutsu/muts_n(持つ)、num(飲む)、pu_n(掘る)、ff_v(降る)、sama_n²²(縛る)、ts_s/ts_s_n(切る)、v:(売る)、ko:(買う)、fo:(食べる)、mu_{roa}(貰う)、aroa

¹⁸ s_iciu は「捨てている」か。

¹⁹ uriru は「降りる」か。

²⁰ aspi は「遊べ」か。

²¹ idace_i は「出せ(命令形)」か。

²² sma_n か。

(洗う)、**b^ju:** (酔う)、/**kiz/ki_n** (蹴る)、/
混合変化/**sti_n/stiz** (捨てる)、**uri_n** (降りる)、**utidus/utidus_n** (落ちゾする)、**uti_mdo:**
(落ちるぞ)、**fi_n** (呉れる)、
不規則/**ts_n** (来る)、**n^ja:ŋ** (無い)、

久貝方言

久貝方言の強変化 (**tub_n** (飛ぶ) など) と不規則変化 **k^s_ns_n/ks:** (来る) は、シ中止形由来形式である。混合変化 (**ukiz** (起きる) など) と弱変化 (**mi:z** (見る) など) は、スル連体形由来である。強変化の ***w** 語幹動詞 (**ko:** (買う) など) は、ス終止形由来、あるいはスル連体形由来形式である。**sn** (死ぬ) は、強変化のス終止形由来、あるいはスル連体形由来形式である。

強変化/**tub_n** (飛ぶ)、**asps** (遊ぶ)、**kug_n** (漕ぐ)、**ik^s_n** (行く)、**utas_n** (落とす)、**idas**
(出す)、**muts** (持つ)、**num** (飲む)、**s_nma_n** (縛る)、**puz** (掘る)、**fu_n** (降る)、**ki_ci**
(切る)、**ki_n** (蹴る)、**ko:** (買う)、**moro:** (貰う)、**fo:** (食べる)、**bju:** (酔う)、**aro:**
(洗う)、**kav** (被る)、**ffv** (閉じる)、**niv** (眠る)、**v:** (売る)、**andz** (言う)、**sn** (死
ぬ)、
弱変化/**ukiz** (起きる)、**sti_n** (捨てる)、**uri_n** (降りる)、**uti_n** (落ちる)、
fi:z (呉れる)、**ukiz** (起きる)、/**mi:z** (見る)、**biziz** (坐る)、**ki_ciz** (着る)、
不規則/**k^s_ns_n/ks:** (来る)、**ss** (する)、**u:** (居る)、**az** (有る)、**n^ja:ŋ** (無い)、

島尻方言

島尻方言の強変化 (**tubz** (飛ぶ)、**kugz** (漕ぐ) など) と不規則変化 **ss** (来る) は、シ中止形由来形式である。混合変化はスル連体形由来である。ただし **uriz/uri** (降りる) はスル連体形由来とシ中止形由来が並存しているようである。弱変化は、**mi:z** がスル連体形由来で、**bz:** がシ中止形由来である。語例がすくなく確定できない。強変化の ***w** 語幹動詞はス終止形由来、あるいはスル連体形由来形式である。**sniz** (死ぬ) は混合変化のスル連体形由来である。

強変化/**tubz** (飛ぶ)、**kugz** (漕ぐ)、**iks** (行く)、**ffv/ff** (降る)、**utus** (落とす)、**kizdus**
(蹴りゾする)、**kss** (切る)、**fgz** (縛る)、**puz** (掘る)、**muts** (持つ)、**kau** (買う)、
v: (売る)、**nun** (飲む)、**fau/fao/fo:** (食べる)、**apps** (遊ぶ)、**bju:** (酔う)、**arau** (洗
う)、**kav** (被る)、**ff/ffv** (閉じる)、**niv** (眠る)、**az** (言う)、**bz:** (坐る)、
弱変化/**st_ciz** (捨てる)、**uriz/uri** (降りる)、**ut_ciz** (落ちる)、**ffiz** (呉れる)、**zziz** (得
る)、**ukiz** (起きる)、**sniz** (死ぬ)、/**mi:z** (見る)、**ss** (着る)、
不規則/**ss** (来る)、**ss** (する)、**az** (有る)、**uz** (居る)、**n^ja:ŋ** (無い)、

狩俣方言

狩俣方言の強変化 (**tubi** (飛ぶ) など) は、シ中止形由来形式であり、(**tu_v** (飛ぶ) など) はス終止形、あるいはスル連体形由来形式であって、ふたつの形式が並存している。混合変化 (**ut_{ei}/ut_{1z}** (落ちる) など) もシ中止形由来とスル連体形由来が並存している。弱変化は、**mi:**がシ中止形由来で、**bz:z** がスル連体形由来である。**kss:** (着る) はどちらなのか確定できない。強変化の*w 語幹動詞 (**ko:** (買う) など) はス終止形由来形式、あるいはスル連体形由来形式である。**sn_{1z}** (死ぬ) は混合変化のスル連体形由来である。不規則変化 **ffu/ff** (来る) はス終止形なのかスル連体形なのか両方の可能性があって確定できない。

強変化 / **tubi/tu_v** (飛ぶ)、**asuvi/asu** (遊ぶ)、**kugi/ku_v** (漕ぐ)、**ifu/if** (行く)、**ut_aŋ₁/ut_as** (落とす)、**idas** (出す)、**muts₁/muts** (持つ)、**num~nu_ŋ** (飲む)、**ffu/fu:** (降る)、**ʔ_ŋ1/ʔ_ŋ2** /**puz** (掘る)、**kiri/kss** (切る)、**sīmari/smaz** (縛る)、**ko:** (買う)、**aro:** (洗う)、**fo:/ʔ_ŋ2** (食う)、**b^hu:** /**b^hu:z** (酔う)、**kavvi/kav** (被る)、**ffi** (閉じる)、**ni_v** (眠る)、**az** (言う)、**v:** (売る)、**ki:/ks:dus** (蹴る)、
弱変化 / **uriz** (降りる)、**ut_{ei}/ut_{1z}** (落ちる)、**uk₁~uk_{1z}** (起きる)、**f₁/f₁1/f₁2** (呉れる)、**sīti/sitidu/s₁t₁** (捨てる)、**kadz:z** (掘る・かじる)、**sn_{1z}** (死ぬ)、**/mi:** (見る)、**kss:** (着る)、**bzz:z** (坐る)、**izita₁/zzidaz** (得る)、
不規則 / **ffu/ff** (来る)、**as** (する)、**uz** (居る)、**az** (有る)、**n^ha:ŋ** (無い)、

池間方言

池間方言の強変化 (**tubi** (飛ぶ) など) は、シ中止形由来形式である。強変化の*w 語幹動詞 (**kau** (買う) など) はス終止形由来形式、あるいはスル連体形由来形式である。語例がすくなく確定できないが、混合変化 (**uki:** (起きる) など) はシ中止形由来であろうか。しかし、スル連体形由来形式の可能性を現段階では否定できない。

弱変化 **bizi** (坐る) などもシ中止形由来であろう。これも現段階ではス終止形由来形式、あるいはスル連体形由来形式の可能性を否定できない。混合変化、弱変化の用例をふやしながら、池間方言でおきた音韻変化を検討しなければならない。**cin^hi** (死ぬ) は混合変化のシ中止形由来であろう。

強変化 / **tubi** (飛ぶ)、**kugi** (漕ぐ)、**ifu** (行く)、**idaci** (出す)、**kiri** (切る)、**numi/nuN** (飲む)、**sīmai** (縛る)、**fu:** (降る)、**kau** (買う)、**fau/fav** (食べる)、**arau** (洗う)、**b^hu:1** (酔う)、**kavvi/kavvi** (被る)、**ffi** (閉じる)、**n^hivvi** (眠る)、**ad^hi** (言う)、
弱変化 / **fi:** (呉れる)、**uki:** (起きる)、**cin^hi** (死ぬ)、**uriru²³** (降りる)、**/bizi** (坐る)、**ts₁:/ts₁i** (着る)、

²³ **uriru** は「降りろ」か。

不規則／*fu* (来る)、*assɿ/aɕɕi* (する)、*urijui/urirui*²⁴ (居る)、*arɿjui* (有る)、*n^ja:N* (無い)、

国仲方言

国仲方言の強変化は、えられた語形がすくないうえに、シ中止形由来形式なのかス終止形由来形式なのか確定しにくい動詞の例しかえられていない。混合変化の得られた1例の *okil/* (起きる) はスル連体形であろう。

強変化／*kaυ* (被る)、*al* (言う)、*sɿN* (死ぬ)、*ɕɿ:/ɕɿ:i* (着る)、*bɿ:/bizi/bɿzɿ* (坐る)、
弱変化／*okil/okilli* (起きる)、*ɕimiɕi* (閉める)、／*mi:ɕi* (見る)、
不規則／*asɿ* (する)、*ol* (居る)、*al* (有る)、*n^ja:N* (無い)、

5. 1 代表形のまとめ

宮古語の代表形の起源をめぐっては、旧平良市市街地 (西里、下里、東仲宗根、西仲宗根) の方言 (以下、平良方言) の当該の形式が日本語のシ中止形と同音であることから、シ中止形由来形式が代表形も連体形も担っていたとする考えがあった。かりまた 1990 もそのように論じた。しかし、これまでの議論は、強変化に対象を限定してなされたものであり、しかも、平良方言を中心にした宮古島方言の旧城辺町、旧上野村、旧下地町など南西部の方言を対象にした議論であった。今回は、狩俣方言、池間方言をくわえ、数に限定があるとはいえ、弱変化、混合変化の資料もあわせて検討し、宮古語の動詞断定形がどのような形式に由来するかをみた。

- 1) 狩俣方言、池間方言以外の下位方言の *k* 語幹動詞、*g* 語幹動詞、*b* 語幹動詞は、代表形がシ中止形に由来する形式である。
- 2) 狩俣方言、池間方言の強変化にはシ中止形由来形式とス終止形由来形式あるいはスル連体形由来形式が並存している。
- 3) **w* 語幹動詞は、ス終止形由来形式、あるいはスル連体形由来形式があらわれている。
- 4) 池間方言の *ɕin^ji* (死ぬ) は混合変化のシ中止形由来形式、狩俣方言の *snɿz* (死ぬ) は混合変化のスル連体形由来形式である。
- 5) 保良、来間、池間の弱変化はシ中止形由来形式、久貝の弱変化は、ス終止形由来形式あるいはスル連体形由来形式である。
- 6) 保良、宮国、池間の混合変化はシ中止形由来形式、来間、島尻の混合変化はスル連体形由来形式である。狩俣の混合変化はシ中止形由来形式とスル連体形由来形式が並存している。
- 7) 保良、砂川、宮国、与那覇、来間、久貝、島尻の不規則変化「来る」は、シ中止形由

²⁴ *tubiui* (飛んでいる) のような継続相形式の補助動詞として /ui/ がみられる。

来形式である。狩俣、池間の不規則変化「来る」はス終止形由来形式あるいはスル連体形由来形式であろう。

- 8) 語幹末が **m**、**s**、**ts**、**r** になる強変化は、シ中止形、ス終止形、スル連体形のいずれに由来するか判別できない。

今回報告した地点については動詞の語例をふやしつつ、それぞれの方言でどのような音韻変化がおきたのかを確認しなければならないし、さらに調査地点をふやしたうえで、検討しなければならない。そのような制約のなかでのまとめとなるが、全体をとおして、シ中止形由来形式、あるいはスル連体形由来形式であることを特定できるが、ス終止形由来形式であることを特定できる方言、あるいは動詞はみあたらない²⁵。

6 アリ中止形

宮古語の中止形のうち、日本語のシテ中止形に類似のはたらきをするのは、アリ中止形である。アリ中止形は、単独で文の部分になり、ならべあわせ文やふたまた述語文の非終止の述語にあらわれ、つづいておこる二つの動作の従属的な、あるいは、非従属的な動作をあらわす。アリ中止形は、複合的な述語をつくることもできる。その点は日本語のシテ中止形に相当する。

24) ki:nu va:gun nu:ri n:to: utaci fi:ru. (木の上に登って実を落としてくれ。) 狩俣

25) tuzzu smari kagonkai iziru. (鶏を縛って籠に入れろ。) 狩俣

26) ta:kja:cidu fnju: ku:gi ksta: (一人で舟を漕いできた。) 保良

27) ki:n nu:ri: nazzu utu:ei fi:ru. (木に登って実を落としてくれ。) 保良

28) ka:ri: bju:itti cununu ku:to: bassii u:ɽ. (彼は酔って昨日のことは忘れている。) 来間

宮古語のアリ中止形は、形式的には、シテ中止形には対応していない。一見すると、古代語のシ中止形に対応するように見える。もし、宮古語のアリ中止形が日本語のシ中止形に対応するのであれば、おおくの宮古語の下位方言で **ki > ks**、**gi > gz**、**bi > bz**、**mi > m**、**si > s**、**tei > ts**、**ri > z** などの音韻変化がおきているので、強変化のアリ中止形は、前述の過去形にふくまれるシ中止形とおなじ、**kaks** (書いて)、**kugz** (漕いで)、**tubz** (飛んで)、**num** (飲んで)、**utus** (落として)、**muts** (持って)、**puz** (掘って) などのような形になるはずである。しかし、アリ中止形は、形のうえで日本語や北琉球諸語のシ中止形に対応しない。単語づくり、形づくりの要素としてあらわれる宮古語のシ中止形の形式とアリ中止形は異なっているのである。アリ中止形がどのような形式であられるかをみてみよう。

²⁵ 八重山語石垣方言の混合変化 **ukiN** (起きる)、弱変化 **mi:N** (見る) はシ中止形由来形式に **N** を後接させたものであり、**ukiruN** (起きる)、**miruN** (見る) はスル連体形由来形式に **N** を後接させたものであろう。

保良方言

強変化／*tubi* (飛んで)、*asɪpi*～*asɪbi* (遊んで)、*kugi*/*kugʷi* (漕いで)、*iki* (行つて)、*ffi* (降つて)、*idaci* (出して)、*utuɕi* (落として)、*puri* (掘つて)、*kiri* (蹴つて)、*kici* (切つて)、*mutɕi* (持つて)、*numi* (飲んで)、*kai* (買つて)、*fai* (食べて)、*arai* (洗つて)、*bju:i* (酔つて)、*vvi* (売つて)、*kavvi* (被つて)、*ffi* (閉じて)、*nivvi* (眠つて)、*fttɕi* (縛つて)、*azzi* (言つて)、／*sɪnʲi* (死んで)、*kici* (着て)、*bizi* (坐て)、
混合変化／*fi* (呉れて)、*utɕi* (落ちて)、*sumi* (洗つて)、*uki* (起きて)、*stei* (捨てて)、*uri* (降りて)、／*mi* (見て)、*i* (得て)、
不規則変化／*kici* (来て)、*ɕi* (して)、*ari* (有つて)、*uri* (居て)、

砂川方言

強変化／*tuvi* (飛んで)、*asɪpi* (遊んで)、*kugi* (漕いで)、*iki* (行つて)、*utuɕi* (落として)、*idaʃi* (出して)、*muʃi* (持つて)、*numi* (飲んで)、*puri* (掘つて)、*sɪmari* (縛つて)、*kɪɕi*/*kici* (切つて)、*kai* (買つて)、*arai* (洗つて)、*fai* (食べて)、*murai* (貰つて)、*bju:i* (酔つて)、*ffi* (降つて)、*vvi* (売つて)、*kavvi* (被つて)、／*kiri* (蹴つて)、
混合変化／*uri* (降りて)、*uti* (落ちて)、*sɪti* (捨てて)、*ffi* (呉れて)、
不規則変化／*kɪɕi*/*kici* (来て)、

宮国方言

強変化／*tuɕi* (飛んで)、*kugi* (漕いで)、*iki* (行つて)、*ffi* (降つて)、*utuɕi* (落として)、*kɪɕi* (切つて)、*sɪmari* (縛つて)、*poɕi* (掘つて)、*idacitɕi*²⁶ (出して)、*motɕi* (持つて)、*kɕai* (買つて)、*uvi* (売つて)、*morai* (貰つて)、*nomi* (飲んで)、*ɕai* (食べて)、*asɪpi* (遊んで)、*arai* (洗つて)、／*kiri* (蹴つて)、
混合変化／*ɕii* (呉れて)、*sɪtɕi* (捨てて)、*ucɪ* (落ちて)、*uri* (降りて)、
不規則変化／*kɪɕi* (来て)、

与那覇方言

強変化／*tubi* (飛んで)、*appi* (遊んで)、*iki* (行つて)、*numi* (飲んで)、*utuɕi* (落として)、*mutɕi* (持つて)、*sɪmari* (縛つて)、*puri* (掘つて)、*kɪɕi* (切つて)、*vvi* (売つて)、*ffi* (降つて)、*ke* (買つて)、*bju:i* (酔つて)、*are* (洗つて)、／*kiri* (蹴つて)、
混合変化／*uri* (降りて)、*uti* (落ちて)、*suɕti* (捨てて)、*ɲzi* (入れて)、*piŋgi* (逃げて)、*fi* (呉れて)、／*zzi* (得て)、
不規則変化／*kɪɕi* (来て)、

²⁶ 他の語形との比較検討すると、シテ中止形か。

来間方言

強変化／*tubi* (飛んで)、*kugi* (漕いで)、*iki* (行つて)、*idas_i* (出して)、*utu_ç_i* (落として)、*mut_e_i* (持つて)、*te_i_ç_i* (切つて)、*smari* (縛つて)、*puri* (掘つて)、*ffi* (降つて)、*nu:ri:* (登つて)、*kai* (買つて)、*vvi* (売つて)、*murai* (貰つて)、*numi* (飲んで)、*fai* (食べて)、*/kiri* (蹴つて)、
混合変化／*uri* (降りて)、*uti* (落ちて)、*sti* (捨てて)、*fi:* (呉れて)、*pi_ŋ_i* (逃げて)、
不規則変化／*te_i_ç_i* (来て)、

久貝方言

強変化／*tubi* (飛んで)、*aspi/aspi:* (遊んで)、*numi* (飲んで)、*kugi* (漕いで)、*u:gi* (泳いで)、*iki* (行つて)、*ka:raki* (乾いて)、*utaci* (落として)、*idaci* (出して)、*mut_e_i* (持つて)、*s₁mari* (縛つて)、*puri* (掘つて)、*javvi:* (破れて)、*furi:* (降つて)、*nu:ri* (上つて)、*vvi:* (売つて)、*kici* (切つて)、*kai* (買つて)、*fai* (食べて)、*b₁uri* (酔つて)、*tskai* (使つて)、*arai* (洗つて)、*kavvi* (被つて)、*ffi* (閉じて)、*nivvi* (眠つて)、*tat_e_i:* (立つて)、*andzi* (言つて)、*/kiri* (蹴つて)、*/sn₁_i* (死んで)、
弱変化／*uri* (降りて)、*uti* (落ちて)、*fa:sari* (轆かれて)、*uki:* (起きて)、*z₁zi* (入れて)、*pi_ŋ_i* (逃げて)、*fi:* (呉れて)、*s₁ti* (捨てて)、*/mi:* (見て)、*bizi* (坐て)、*zzi* (得て)、*kici* (着て)、
不規則変化／*kici* (来て)、*ç_i:* (して)、*ari:* (有つて)、*uri:* (居て)、

島尻方言

強変化／*tubi* (飛んで)、*appi* (遊んで)、*kugi* (漕いで)、*ujagi* (泳いで)、*iki* (行つて)、*utuci* (落として)、*idaci* (出して)、*mut_e_i* (持つて)、*numi* (飲んで)、*piri* (行つて)、*ffi* (降つて)、*kici* (切つて)、*vvi* (売つて)、*fgzzi* (縛つて)、*puri* (掘つて)、*kavvi* (被つて)、*ffi* (閉じて)、*kai* (買つて)、*fai* (食べて)、*b₁uri* (酔つて)、*arai* (洗つて)、*nivvi* (眠つて)、*azzi* (言つて)、*/kiri* (蹴つて)、
弱変化 *uki* (起きて)、*uri* (降りて)、*ste_i* (捨てて)、*ute_i* (落ちて)、*izi:* (入れて)、*sskai* (轆かれて)、*bace_i* (忘れて)、*fi:* (呉れて)、*pi_ŋ_i* (逃げて)、*/sn₁_i* (死んで)、*/mi:* (見て)、*bizi* (坐て)、*ç_e_i* (着て)、*zzi* (得て)、
不規則変化／*ç_e_i* (来て)、*ç_i:* (して)、*uri* (居て)、

狩俣方言

強変化／*asbi* (遊んで)、*tubi* (飛んで)、*numi* (飲んで)、*kugi* (漕いで)、*uigi* (泳いで)、*iki* (行つて)、*idaci* (出して)、*utaci* (落として)、*mut_e_i* (持つて)、*ffi* (降つて)、*kici* (切つて)、*smari* (縛つて)、*puri* (掘つて)、*kadzi* (掘つて)、*v₁vi* (売つて)、*kavvi* (被つて)、*nivvi* (眠つて)、*ffi* (閉じて)、*kai* (買つて)、*fai* (食べて)、*b₁uri* (酔つて)、

arai (洗って)、azzi (言って)、／kiri (蹴って)、
弱変化／uri (降りて)、uti (落ちて)、uki (起きて)、citi (捨てて)、fi: (呉れて)、pingi
(逃げて)、bacci (忘れて)、cikari (轆かれて)、／mi: (見て)、izi (得て)、bizi (坐
て)、kici (着て)、／snji (死んで)、
不規則変化／kici (来て)、aci (して)、ari (有って)、uri (居て)

池間方言

強変化／tubi (飛んで)、aeibi: (遊んで)、numi: (飲んで)、kugi (漕いで)、u:gi (泳い
で)、iki:/iki: (行つて)、ka:ki (乾いて)、utaçi/utaçi: (落として)、idaçi: (出して)、
muti: (持って)、nu:ri: (登って)、ffi: (降って)、kiri: (切つて)、simari: (縛って)、
furi: (掘って)、vvi: (売って)、kavvi/ kavvi: (被って)、ffi: (閉じて)、sadari: (先
だつて)、nivvi/ nivvi: (眠って)、hari: (行つて)、kai (買つて)、arai (洗って)、fai
(食べて)、bi:ri (酔って)、adzi: (言つて)、kiri: (蹴って)、
弱変化／uki: (起きて)、uri/ uri: (降りて)、uti: (落ちて)、si:ti: (捨てて)、bacci (忘
れて)、hikai: (轆かれて)、çinggi (逃げて)、sımi:/sımi: (洗つて)、fi: (呉れて)、dđzi
(得て)、／mi: (見て)、tti: (着て)、bizi: (坐て)、cinji (死んで)、
不規則変化／tti (来て)、çi: (して)、ari: (有って)、uri (居て)、

国仲

強変化／kavvi: (被って)、nivvi: (眠って)、a²zi: (言つて)、／sıni: (死んで)、／tei:
(着て)、bizi: (坐て)、
弱変化／okii (起きて)、p^oıkaii (轆かれて)、cimii/cimi (閉じて)、taskari (助かつて)、
／mi: (見て)、
不規則変化／ei: (して)、arii (有って)、ore: (居て)、

宮古語の、強変化のアリ中止形は、子音でおわる語幹に i をつけてつくられ、弱変化のアリ中止形は、母音でおわる基本語幹と同形である。強変化のばあい、語尾は e にさかのぼり、弱変化の末尾の母音も e にさかのぼる。

後述するように、アリ中止形は、シ中止形に後接した存在動詞 az (有る) のシ中止形が文法化して融合したものとかんがえるが、確定できているとはまだいえない²⁷。宮古語、および八重山語諸方言の当該形式の調査、研究を継続して行なう必要がある。

7. 1 アリ中止形の性格

形式と由来はことなるが、宮古語のアリ中止形の文法的なふるまいは、北琉球諸語のシテ

²⁷ 名嘉真三成 (1982) は、宮古諸語の当該形式をシテ中止形とみている。

中止形とおなじである。あわせ文やふたまた述語文の中止的な述語になるだけでなく、継続相や *numi mi:ru* (飲んでみる)、*tubi mi:ru* (飛んでみる) などのもくろみ動詞や、*sti fi:ro* (捨ててくれ)、*teiei fi:ru* (切ってくれ) などのやりもらい動詞をつくる要素となるなどの用法もおなじである。

継続相の形式は、存在動詞 *uz*、*u:* がアリ中止形にくみあわさった *acibi ui* (遊んでいる)、*ffi u₁* (降っている) の分析的な形のほかに、*acib^ju:ri* (遊んでいる)、*f^ju:z₁* (降っている) などの融合した総合的な形式が並存している。29)~32) の用例の主体動作動詞の継続相は、主体動作が継続していることをあらわし、33)~40) の用例の主体変化動詞の継続相は、変化した主体の結果的な状態が継続していることをあらわす。継続相のあらわすアスペクト的な意味の実現のしかたも北琉球諸語のシテ中止形に似ている²⁸。

主体の動作継続

- 29) *ffaf naik^jata:çi: araN acibi ui / acib^ju:ri* (暗くなるまで外で遊んでいる)。池間
30) *mainitçi tereb^ju: mi: jui* (毎日テレビを見ている)。池間
31) *nama: aminudu ffi u₁ / f^ju:z₁*. (今、雨が降っている。) 砂川
32) *nnama: aminudu fju: / ffju:.* (今は雨が降っている。) 狩俣

主体の変化結果の継続

- 33) *upuaminu ffittçidu p^ja:rinu ts¹ok^ju:.*
(大雨が降って、日照りが続いている。) 保良
34) *kar^ja: b^ju:ittidu k⁵nu:nu kutu:ba baccidu u₁.*
(彼は酔って昨日のことは忘れている。) 砂川
35) *gaba:aminu ffi: ntanu ka:ki jui.*
(彼は昨日のことは忘れている。) 狩俣
36) *kar^ja: ksnunu kutu:ba: baccⁱ u₁.*
(大雨が降って土が乾いている) 池間
37) *bo:eu: utucitçidu tuzga ik^ju:ta:.*
(帽子を落として取りに行っていた。) 保良
38) *bututuzza jamakasa numi:du b^ju:ri uta:.*
(おとといはたくさん飲んで酔っていた。) 久貝
39) *cinei:ja bizicitidu, ffanukja:ja tatei: uta:.*

²⁸ 存在動詞 *az* (有る) のアリ中止形に *uz* を組み合わせた継続相の形式があり、話の瞬間に存在した一時的な状態を表わす。

maznu ama:tta ari uz. (米がたくさん有る。) 島尻

kumanna ka:nu arju:ta: . (ここには井戸が有った。) 久貝

(先生は坐て、子どもたちは立っていた)、久貝

40) ku:mujamai sni:du jumunumai sni u:.

(ゴキブリも死んで、ネズミも死んでいる。)久貝

宮古語の動詞のアスペクト・テンス対立のしかたは、音声形式こそちがえど2項対立型の東日本諸語(現代日本語)のそれに似る。

	非過去	過去
完成相	asps (遊ぶ) sn (死ぬ)	aspsta: (遊んだ) snta: (死んだ)
継続相	aspju: (遊んでいる) snju: (死んでいる)	aspju:ta: (遊んでいた) snju:ta: (死んでいた)

表6 保良方言のアスペクト・テンス

宮古語のアリ中止形がそのまま文末の述語の位置にあらわれて、過去のできごとをあらわすことができるが、それも北琉球諸語のシテ中止形に似ている。沖縄島方言のばあい、完成相の肯否質問の過去形にシテ中止形があらわれ、奄美大島方言ではシテ中止形が直説法の過去形としてあらわれる。詳細は稿をあらためて論じたい。

41) kju:ja tubansuga ksno: tubi (今日は飛ぶないが、昨日は飛んだ)。狩俣

42) ksnumaidu ingaija iki (昨日も海へは行った)。狩俣

43) ksno aminudu ffi/fftaz (昨日は雨が降った)。狩俣

7. 2 アリ中止形の由来

ところで、沖縄島の諸方言にもアリ中止形がみられる。沖縄島中南部諸方言のアリ中止形は、あわせ文の中止的な述語として機能し、宮古語のようなさまざまな文法形式を構成しない。首里方言のアリ中止形は、numa:ni、あるいは numai であらわれ、『沖縄語辞典』(国立国語研究所 1963)によると、numai の方がより古い形式である。

宮古語のアリ中止形にもっとも似ているのは、伊平屋島方言、伊是名島方言のアリ中止形であろう。伊平屋方言、伊是名島方言のアリ中止形はあわせ文の述語になるだけでなく、宮古語のアリ中止形と同様に継続相、結果相などの単語づくり、形づくりの要素になることができ、生産性がある。

	書いて	遊んで	起きて	降りて	洗って	似て
首里方言	katʃa:i	?afiba:i	?ukija:i	?urija:i	?araja:i	nija:i
伊平屋方言	katʃe:	?afine:	?ukije:	?urije:	?araje:	nije:

平良方言	kaki:	aspi:	uki:	uri:	arai:	ni:
石垣方言	kaki:	asɔbi:	uke:	ure:	araja:	nija:

表7 沖縄諸方言、宮古語、八重山語のアリ中止形

- 44) ?amaNdʒi ?afine: hwa:. (向こうで遊んで来い。) 伊平屋村我喜屋
 45) ?utuhe: hu:. (落として来い。) 伊是名村勢理客
 46) ?widʒe: watataN. (泳いで渡った。) 伊是名村諸見
 47) bo:ʃi hauje: ?attʃuN. (帽子をかぶって歩く。) 我喜屋

 48) ?naNma ?aminu hujo:N. (今雨が降っている。) 諸見
 49) ?nama ?ami hujoN. (今雨が降っている。) 島尻
 50) hunu ?iʃi kije: Nri. (この石を蹴ってみろ。) 我喜屋

伊平屋村我喜屋、野甫、島尻の方言には、過去形に?afinaN (遊んだ)、sukunaN (死んだ・我喜屋・島尻、参考: ʃikudaN 諸見)、nunaN (飲んだ)、junaN (呼んだ) などの語形があるが、アリ中止形に?aN (有る) が接続してできた過去形だと考えられる。ただし、この系列の過去形はシテ中止形に由来する過去形?afidaN (遊んだ) などに使用の場をうばわれ、使われなくなっている。

沖縄島諸語のアリ中止形は、シ中止形 (numi 飲み) に?ai (有り) が組み合わさってできたもので、主として先行後続の関係をあらわす。1531年に第一巻が編纂された古歌謡集『おもろさうし』には「～やり」の形でみられる。『おもろさうし』に出てくる「～やり」の形を高橋俊三 (1982) は「連用形+やり」の形で完了の意味を表わす。用例は中止法のみである。」と指摘している。

- 51) (通巻 176 巻) 「とよむ 大きみや もゝしま そろへやり みおやせ。」(訳: 名高い大君は百島を揃えて差し上げよ。)
 52) (通巻 632 巻) 「いと ぬきやり、 なわ ぬきやり、」(訳: 糸を貫いて、縄を貫いて)

宮古語の強変化のアリ中止形は、基本語幹に i あるいは i: を後接させた形式である。いっぽう、弱変化、混合変化のアリ中止形は、シ中止形 (基本語幹と同音) と同音である。強変化のシ中止形とアリ中止形は形式がにているが、過去形の語幹部分にあらわれるシ中止形をみると、強変化のシ中止形の語尾は *i にさかのぼり、アリ中止形の語尾は *e にさかのぼる。宮古語のアリ中止形は、伊平屋方言のアリ中止形のような形式から変化したものではないかとかんがえる。

補注) 沖縄島諸方言のアスペクト・テンス体系は、3項対立型の西日本諸語の変化した形式

のようにもみえる。継続相の形式もシテ中止形に人の存在を表わす動詞が組み合わさって融合した形であり、形の上からは西日本諸語のパーフェクト相の *citoru* に対応する。しかし、アスペク的な意味は、西日本諸語の *citoru* とちがって、主体動作動詞が主体の動作継続をあらわし、主体変化動詞が主体の変化結果の継続をあらわして、東日本諸語の継続相および宮古語の継続相と同じである。

八重山方言もアリ中止形に *uN*(居る)が組み合わさっていて、たとえば石垣方言では *numi: uN > numiN* (飲んでいる)、*uke: uN > uke:N* (起きている)、*kaNgaja: uN > kaNgaja:N* (考えている) のような音声的に融合した形が表われる。

53) *utudo: guci numiN* (弟は酒を飲んでいる)。動作継続

54) *aQpa:ja me: uke:N* (母はもう起きている)。変化結果の継続

アスペクト・テンス体系のあり方をみると、沖縄島南部語は *suru*、*cijoru*、*citoru* の3項対立である点が西日本諸語のそれに似るが、継続相のあり方が東日本諸語のそれに似ていて、独自の体系をなしている。宮古語は、2項対立という点と継続相のあり方が東日本諸語のそれに似ているが、継続相の形のつくり方が東日本諸語のそれとはことなっていて、独自に体系をもっている。沖縄島南部語、宮古語は、西日本諸語、東日本諸語のそれぞれ類似点と相違点をもちながらも、それぞれに独自の体系をなしているといっていよう。

	非過去	過去
完成相	<i>?afibuN</i> (遊ぶ) / <i>?finuN</i> (死ぬ)	<i>?afidaN</i> (遊んだ) / <i>?fid3aN</i> (死んだ) <i>?afibutaN</i> (遊んだ) <i>?finutaN</i> (死んだ)
継続相	<i>?afido:N</i> (遊ぶ) <i>?fid3o:N</i> (死ぬ)	<i>?afido:taN</i> (遊んでいた) / <i>?fid3o:taN</i> (死んでいたぬ)

表7 沖縄島うるま市安慶名方言のアスペクト・テンス

8 シテ中止形

宮古語のシテ中止形は、ならべあわせ文のつづける文の述語になり、日本語のシテ中止形と類似のはたらきをし、形式上もシテ中止形に似る。しかし、非従属的な用法をもたず、継続相、もくろみ動詞、やりもらい動詞などの形式をつくる要素にならない。その点で日本語や北琉球諸語のシテ中止形とことなる。

55) *oto:ja sakju: mutcittci, mma: faumunu: muts.*

(父は酒を持つて、母は食物を持つ。) 狩俣

56) mmadu₁nu tubittēi, fa:du₁mai tubin₁a:n.

(親鳥が飛んで、子鳥も飛んでしまった。) 狩俣

57) fnju: kugitti unu atu jukui.

(船を漕いで、そのあと休め。) 来間

58) fun¹u: kugittikara jukui (船を漕いでから休め)。砂川

59) fu₁sizzu numitti pja:pja:ti nivvi (薬を飲んで早く寝ろ)。砂川

保良方言

保良方言のシテ中止形は、アリ中止形に tte_i のついた形である。保良方言では tēi: (手)、teida (太陽) などのように他の下位方言で ti となるところが破擦音化して tēi になるので、tte_i も tti の変化したものであろう。

強変化／tubittēi (飛んで)、kugittēi (漕いで)、ikittēi (行って)、ffittēi (降って)、utucittēi (落として)、kicittēi (切って)、fttēittēi (縛って)、purittēi (掘って)、idaēittēi (出して)、mutēittēi (持って)、kaittēi (買って)、vvittēi (売って)、numittēi (飲んで)、faittēi (食って)、as₁pittēi~as₁bittēi (遊んで)、numittēi (飲んで)、araittēi (洗って)、kavvittēi (被って)、ffittēi (閉じて)、nivvtēi (眠って)、azzittēi (言って)、kirittēi (蹴って)、kicittēi (着て)、bizzittēi (坐て)、s₁njittēi (死んで)、
混合変化／ukittēi (起きて)、urittēi (降りて)、utēittēi (落ちて)、stēittēi (捨てて)、fittēi (呉れて)、mittēi (見て)、irttēi (得て)、
不規則変化／kicittēi (来て)、ēirttēi (して)、arittēi (有って)、urittēi (居て)、

砂川方言

砂川方言のシテ中止形は、アリ中止形に tti のついた形である。

強変化／tuvitti (飛んで)、as₁pitti (遊んで)、numitti (飲んで)、kugittikara (漕いでから)、ikitti (行って)、ida₁fitti (出して)、mu₁fitti (持って)、utucitti (落として)、ffitti (降って)、puritti (掘って)、ki₁cciti/kic₁citi (切って)、ēimaritti (縛って)、kavvitti (被って)、araitti (洗って)、kaitti (買って)、vitti (売って)、muraitti (貰って)、faitti (食って)、bjuritti (酔って)、／kiritti (蹴って)、
混合変化／uritte (降りて)、utittii (落ちて)、ffitti (呉れて)、stitti (捨てて)、
不規則変化／kicitti (来て)、

宮国方言

宮国方言のシテ中止形は、アリ中止形に cci のついた形である。保良方言のような破擦音化がおきたのであろう。

強変化／*kugicci* (漕いで)、*ikiccie* (行つて)、*ficci* (降つて)、*utuſitt·i* (落として)、*kisitte* (切つて)、*porittci* (掘つて)、*idacitei* (出して)、*uvittci* (売つて)、*noमितtei* (飲んで)、*aittei* (食つて)、*asipittci* (遊んで)、*araittei* (洗つて)、*nu·ricci* (登つて)、*moraittei* (貰つて)、*b·oittei* (酔つて)、
混合変化／*ucicci* (落ちて)、*si·cicci* (捨てて)、*aittei* (呉れて)、
不規則変化／*kisicci* (来て)、

与那覇方言

与那覇方言のシテ中止形は、アリ中止形に *titi* のついた形である。

強変化／*tubititi* (飛んで)、*kugititi* (漕いで)、*v : gititi* (泳いで)、*ikititi* (行つて)、*ffititi* (降つて)、*utucititi* (落として)、*kicititi* (切つて)、*simititi* (縛つて)、*idasititi* (出して)、*mucititi* (持つて)、*kaititi* (買つて)、*vvititi* (売つて)、*numititi* (飲んで)、*fe : titi* (食つて)、*appititi* (遊んで)、*bu : ititi* (酔つて)、*are : titi* (洗つて)、*kirititi* (蹴つて)、
混合変化／*urititi* (降りて)、*utititi* (落ちて)、*sutititi* (捨てて)、*fititi* (呉れて)、*zzititi* (得て)、
不規則変化／*kicititi* (来て)、

来間方言

来間方言のシテ中止形は、アリ中止形に *titi* のついた形である。

強変化／*tubititi* (飛んで)、*kugititi* (漕いで)、*ikititi* (行つて)、*utuçititi* (落として)、*ffaçititi* (切つて)、*çititi* (切つて)、*smarititi* (縛つて)、*ffititi* (降つて)、*idasititi* (出して)、*vvititi* (売つて)、*numititi* (飲んで)、*faititi* (食つて)、*aspititi*²⁹ (遊んで)、*b·u : ititi* (酔つて) *araititi* (洗つて)、*kirititi* (蹴つて)、
混合変化／*urititi* (降りて)、*utititi* (落ちて)、*stititi* (捨てて)、*fi : titi* (呉れて)、
不規則変化／*çititi* (来て)、

久貝方言

久貝方言のシテ中止形は、*aspçititi* (遊んで)、*ukicititi* (起きて) のようにアリ中止形に *çititi* がついた形と、*kugititi* (漕いで)、*urititi* (降りて) のように *titi* のついた形が混在している³⁰。

²⁹ 他のシテ中止形と異なりシ中止形に *titi* がついた形になっている。確認が必要か。

³⁰ *puriciti* (掘つて)、*ciciti* (して) などの *citi* を語末に持つ語形の話者は、狩俣が 2011 年 12 月の調査で得たものである。

話者の違いによるのか、周辺方言の影響なのか、確認が必要である。

強変化／*aspsciṭi* (遊んで)、*kugitti* (漕いで)、*numiciṭi* (飲んで)、*idaciṭi* (出して)、*utaciṭi* (落として)、*mutciṭi* (持って)、*puriciṭi* (掘って)、*kiṭiṭi* (切って)、*samaritti* (縛って)、*vviciṭi* (売って)、*kavviciṭi* (被って)、*fficiṭi* (閉じて)、*nivviciṭi* (眠って)、*kaiciṭi* (買って)、*faiciṭi* (食って)、*bjuriciṭi* (酔って)、*araciṭi* (洗って)、*andziṭi* (言って)、*kiriti* (蹴って)、*sniciṭi* (死んで)、
弱変化／*ukiciṭi* (起きて)、*uritti* (降りて)、*utitti* (落ちて)、*sṭitti* (捨てて)、*fi:ciṭi* (呉れて)、
不規則変化／*k^sṛiciṭi* (来てから)、*ci:ciṭi* (して)、*ariciṭi* (有って)、*uriciṭi* (居て)、

島尻方言

島尻方言のシテ中止形も、アリ中止形に *cci* のついた形である。保良方言のような破擦音化がおきたのであろう。

強変化／*tubittei* (飛んで)、*appittei* (遊んで)、*numittei* (飲んで)、*kugittei* (漕いで)、*idacittei* (出して)、*utucittei* (落として)、*mutcettei* (持って)、*kiṭiṭtei* (切って)、*purittei* (掘って)、*ffittei* (降って)、*vvittei* (売って)、*kavvittei* (被って)、*ffittei* (閉じて)、*nivvttei* (眠って)、*kaittei* (買って)、*araittei* (洗って)、*faittei* (食って)、*bjurittei* (酔って)、*azzittei* (言って)、
弱変化／*ukittei* (起きて)、*urittei* (降りて)、*utettei* (落ちて)、*stettei* (捨てて)、*fi:ttei* (呉れて)、*snittei* (死んで)、
不規則変化／*ciṭtei* (来て)、*acittei* (して)、*arittei* (有って)、*urittei* (居て)、

狩俣方言

狩俣方言のシテ中止形も久貝方言のようにアリ中止形に *ciṭi* がついた形である。

強変化／*tubiciṭi* (飛んで)、*asbiciṭi* (遊んで)、*kugiciṭi* (漕いで)、*numiciṭi* (飲んで)、*ikiciṭi* (行って)、*utaciṭi* (落として)、*idaciciṭi* (出して)、*mutciṭi* (持って)、*fficci* (降って)、*puriciṭi* (掘って)、*kiṭiṭi* (切って)、*vviciṭi* (売って)、*kavviciṭi* (被って)、*fficiṭi* (閉じて)、*nivviciṭi* (眠って)、*kaiciṭi* (買って)、*araciṭi* (洗って)、*faiciṭi* (食って)、*azziciṭi* (言って)、*sniciṭi* (死んで)、
弱変化／*ukicci* (起きて)、*uriciṭi* (降りて)、*uticiṭi* (落ちて)、*ciṭiṭi* (捨てて)、*fi:ciṭi* (呉れて)、*ciṭiṭi* (閉めて)、
不規則変化／*mi:ciṭi* (見て)、*iziciṭi* (得て)、*kiṭiṭi* (着て)、*biziciṭi* (坐て)、

不規則変化／*kiciciti* (来て)、*aciciti* (して)、*ariciti* (有って)、*uriciti* (居て)、

池間方言

以下の3単語にシテ中止形がみられるが、シテ中止形が期待されるところにはほとんどアリ中止形があらわれている。不規則変化の *tti* (来て) もアリ中止形とホモニムである。池間方言がシテ中止形を使用しないのか、調査の仕方を変えればシテ中止形がえられるのか、いずれにせよ、確認はひつようであろう。

強変化／*kugitti* (漕いで)、

弱変化／*sanɕari : ti* (落ちて)、

不規則変化／*tti* (来て)、

国仲方言

国仲方言は、調査でえられた語例がすくなく、シテ中止形について言えることもすくないが、確実にシテ中止形といえる語例がみられない。シテ中止形を調査する例文のところに *alzii* (言って)、*nivvii* (眠って)、*sɔnii* (死んで) の語形があり、アリ中止形を調査する例文のところに、*a^zzi :* (言って)、*nivvi :* (眠って)、*sɔni :* (死んで) の語例があつて、両者がことなる語形であるが、これが有意味な違いであるのか不明であり、再調査が必要である。

強変化／*kavvi :* (被って)、*nivvii* (眠って)、*alzii* (言って)、*/sɔnii* (死んで)、*/tei :* (着て)、*bizi :* (坐て)、

弱変化／*okii* (起きて)、*p^ɔɔkaii* (轆かれて)、*ɕimii* (閉じて)、*taskari* (助かつて)、*/mi :* (見て)、

不規則変化／*ɕi :* (して)、*arii* (有って)、*ore :* (居て)、

宮古語諸方言のシテ中止形は、砂川方言の *uritti* (降りて)、*utittii* (落ちて) なども、保良方言の *tubittei* (飛んで)、*kugittei* (漕いで) などの破擦音化したものも促音便がおきたようにもみえる。しかし、動詞のタイプをとわず強変化にも弱変化にも混合変化にも不規則変化にも同じ形式があらわれていて、音便とは関係のないものであろう。

強変化のシテ中止形は、子音語幹に語尾 *itti* や *ittei* が後接し、弱変化のシテ中止形は母音語幹に *tti* や *ttei* が後接している。いずれもアリ中止形に *tti* や *ttei* がついた形である。

狩俣方言の *tubiciti* (飛んで)、*kugiciti* (漕いで) や久貝方言の *kaiciti* (買って)、*fi:ɕiti* (呉れて) などから、アリ中止形に *ɕiti* (シテ、あるいは捨て) のような形式が後接したもののようにみえる。今後の調査と検討が必要である。

八重山語石垣方言にも *kakiQte* (書いて)、*uke:Qte* (起きて)、*mija:Qte* (見て)、*ɕi:Qte*

(して) のように、アリ中止形に Qte がつづくシテ中止形がある。

9 おわりに

かぎられた調査期間だったので、得られた資料にも制限があるし、調査項目が動詞の活用形のうち代表形(スル)、否定形(シナイ)、過去形(シタ)、アリ中止形、シテ中止形の五つであったという制限もある。しかし、保良、砂川、宮国、与那覇、来間島、久貝、島尻、狩俣、池間島、伊良部島国仲の宮古島の東西南北の地点がバランスよく調査されている。そのおかげで、宮古語の活用のタイプについての概観、宮古語の五つの活用形についての概観ができたのではないかと考える。

今後は、個々の地点の動詞の数をふやすと同時に、活用形の数もふやして調査をすすめることが必要だろう。また、今回は調査できなかった大神島方言、伊良部島佐和田・長浜方言、おなじく伊良部島伊良部・仲地方言、多良間島方言などの宮古語のなかでも個性的な特徴をもつことでしられる下位方言を検討していくことも必要である。

参考文献

- 伊是名島方言辞典編集委員会(2004)『伊是名島方言辞典』伊是名村教育委員会
- かりまたしげひさ(2011)「琉球方言の焦点化助辞と文の通達的なタイプ」『日本語の研究』第7巻4号、日本語学会、pp69~81
- かりまたしげひさ(2009a)「宮古島市城辺字保良方言の動詞の終止形」『琉球語諸方言の動詞、形容詞の形態論に関する調査・研究』平成16~19年度度基盤研究(B)成果報告書、pp1~28
- かりまたしげひさ(2009b)「宮古島市城辺字保良方言の動詞の連用形、連体形、条件形」『琉球語諸方言の動詞、形容詞の形態論に関する調査・研究』平成16~19年度度基盤研究(B)成果報告書、pp29~60
- かりまたしげひさ(2009c)「宮古島市城辺字保良方言の動詞の形づくり」『琉球語諸方言の動詞、形容詞の形態論に関する調査・研究』平成16~19年度度基盤研究(B)成果報告書、pp61~84
- かりまたしげひさ(1999)「宮古諸方言の動詞「終止形」の成立について」『日本東洋文化論集』第5号、pp27~51
- かりまたしげひさ(1989)「琉球方言における「第三中止形」について」『沖縄言語研究センター資料No81』
- 高橋俊三(1991b)『おもろさうしの動詞の研究』武蔵野書院
- 名嘉真三成(1982)「琉球宮古方言の動詞の接続形」『沖縄文化』58号
- 本永守靖(1973)「平良方言の動詞の活用」『琉球大学教育学部紀要』第17集第1部、pp27~41